JICA海外協力隊向け実践ガイド

クロスロード

CROSSROADS

3

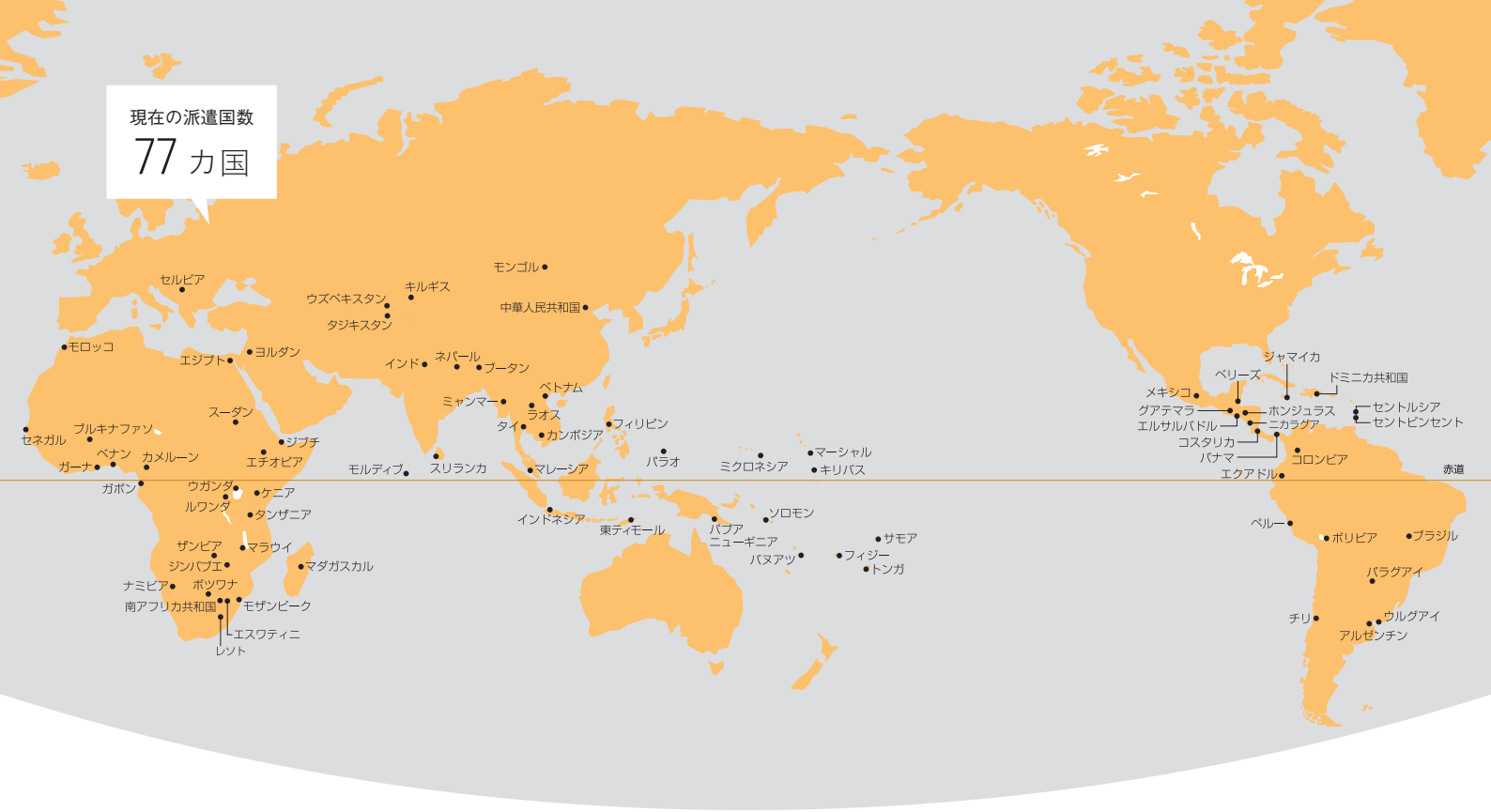
2019 MARCH

特集1

社会福祉分野の活動ポイント

特集2

活動の“CHECK”



JICA海外協力隊 派遣現況

（2019年1月末現在）

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	46	2
エスワティニ	4	1
エチオピア	36	
ガーナ	58	3
ガボン	19	9
カメルーン	26	1
ケニア	44	8
ザンビア	81	15
ジブチ	11	
ジンバブエ	4	
スーダン	28	
セネガル	43	3
タンザニア	64	3
ナミビア	13	
ブルキナファソ	18	
ベナン	53	
ボツワナ	14	
マダガスカル	36	
マラウイ	66	
南アフリカ共和国	6	5
モザンビーク	41	3
ルワンダ	41	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	12	
インドネシア	15	2
ウズベキスタン	24	5
カンボジア	34	10
キルギス	28	
スリランカ	46	2
タイ	33	5
タジキスタン		4
中華人民共和国	12	
ネパール	50	3
東ティモール	32	
フィリピン	29	3
ブータン	19	6
ベトナム	41	22
マレーシア	19	8
ミャンマー	9	4
モルディブ	11	
モンゴル	42	
ラオス	43	3

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	7	
サモア	26	1
ソロモン	35	6
トンガ	15	2
バヌアツ	20	5
パプアニューギニア	29	5
パラオ	9	5
フィジー	25	3
マーシャル	10	3
ミクロネシア	12	9

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	1	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
エジプト	18	3
モロッコ	24	7
ヨルダン	30	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		16	7	8
ウルグアイ		8		
エクアドル	56	5		
エルサルバドル	8			
グアテマラ	28	3		
コスタリカ	23	10		
コロンビア	14	16		
ジャマイカ	19	13		
セントビンセント	5			
セントルシア	8			
チリ	6	5		
ドミニカ共和国	33	7	5	1
ニカラグア	2			
パナマ	20	1		
パラグアイ	42	2	12	3
ブラジル			76	21
ベリーズ	14			
ペルー	41	5		
ボリビア	43	3	2	1
ホンジュラス	32			
メキシコ	1	9		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 （男性／女性）	1,908 （826／1,082）	285 （204／81）	102 （35／67）	34 （11／23）	2,329 （1,076／1,253）
累計 （男性／女性）	44,693 （23,796／20,897）	6,469 （5,235／1,234）	1,472 （560／912）	542 （252／290）	53,176 （29,843／23,333）

JV ＝ 青年海外協力隊
SV ＝ シニア海外ボランティア
日系JV ＝ 日系社会青年ボランティア
日系SV ＝ 日系社会シニア・ボランティア（単位：人）

クロスロード

2019 MARCH

■職種別索引　掲載ページ

コミュニティ開発	14、22
水質検査	24
レスリング	25
PCインストラクター	16
小学校教育	4、18
作業療法士	4
理学療法士	4、20
感染症対策	26
ソーシャルワーカー	10、28
障害児・者支援	6、8

■国別索引　掲載ページ

ウガンダ	4、22、26
エクアドル	14
ケニア	8、24
コロンビア	6
セネガル	25
ソロモン	16
タイ	4
ベナン	18
モンゴル	10、20

■出身都道府県別索引　掲載ページ

埼玉県	20
千葉県	16
石川県	18
静岡県	6、24、26
愛知県	14
兵庫県	25
岡山県	10
鹿児島県	8
沖縄県	22

4 JICA Volunteers' NEWS
▶隊員が協働し、定着を目指したリハビリ支援活動が省庁のコンテストで入賞（タイ）
▶「ナイル川源流橋」の開通を記念した絵画コンテストで教え子が入賞（ウガンダ）

特集1
社会福祉分野の活動ポイント

6 CASE 1　障害者支援NGOでの活動
柏 萌菜美さん（コロンビア・障害児・者支援・2016年度1次隊）

8 CASE 2　特別支援学校の運営改善
牧 ちさとさん（ケニア・障害児・者支援・2016年度1次隊）

10 CASE 3　大学でのソーシャルワーカー育成
小野由貴さん（モンゴル・ソーシャルワーカー・2016年度2次隊）

12 活動Q&A集

特集2
活動の"CHECK"

14 CASE 1　協働のCHECK
河村美沙さん（エクアドル・コミュニティ開発・2016年度1次隊）

16 CASE 2　授業のCHECK
宮野幸恵さん（ソロモン・PCインストラクター・2016年度2次隊）

18 CASE 3　研修会のCHECK
酒井ひかりさん（ベナン・小学校教育・2016年度1次隊）

20 CASE 4　OJTのCHECK
後上正幸さん（モンゴル・理学療法士・2016年度1次隊）

22 "失敗"から学ぶ
照屋大地さん（ウガンダ・コミュニティ開発・2016年度2次隊）

24 希少職種図鑑
▶水質検査　伏見秀明さん（ケニア・2016年度3次隊）
▶レスリング　魚住彰吾さん（セネガル・2016年度3次隊）

26 JICA Volunteer's Before ▸ After ～人生を変えた2年間～
厚生労働省 検疫官　髙橋永知さん（ウガンダ・感染症対策・2010年度2次隊）

28 OB・OG匿名座談会
ソーシャルワーカー篇

30 JICA海外協力隊的プチテクガイド
アイスブレイクの手法／あるもので日本の味／写真を楽しむ

32 INFORMATION

34 JICA海外協力隊のつぶやき
お題：「ゴリ押し」

35 JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介

【凡例】

❶JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2018年度3次隊）			
氏名	派遣国	職種	隊次

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニア・ボランティア」）の方々は、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

❷JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY
レイアウト：S+M DESIGN FACTORY
印刷・製本：弘報印刷（株）

Thailand

隊員が協働し、定着を目指したリハビリ支援活動が省庁のコンテストで入賞

文 ＝ 鈴木理絵さん（タイ・作業療法士・2017年度1次隊）、徳田壌二さん（タイ・理学療法士・2017年度1次隊）、狩俣美紀さん（タイ・作業療法士・2017年度2次隊）

研修内の浅海SVの講義で寸劇を行い、場を盛り上げる鈴木JVと北部労災リハの同僚。研修後の参加者によるアンケートの満足度は95パーセント、「新しい知識が増えた」「チーム医療は大切だと感じた」と高い評価結果が得られた

活動の流れ	
〈5カ月前〉きっかけ	労災リハ配属の青年海外協力隊（JV）の問題認識が共通していることに気がつく。
〈4カ月前〉企画	シニア海外ボランティア（SV）へICFの研修会を依頼する。
〈1カ月前〉開催準備	JVとSVが連絡を取り合い同僚とともに研修会の準備を進める。
〈当日〉開催	ICF研修会を開催。
〈1カ月後〉伝達講習	各配属先にてタイ人主体で伝達講習を行う。
〈2カ月後〉運用	ICFを使用した患者会議が始まる。
〈6カ月後〉受賞	SSO Good Practice Awardにて入賞する。

タイには労働省傘下に労災リハビリテーションセンター（以下、労災リハ）が5施設あり、そのうち4施設に青年海外協力隊（以下、JV）が派遣されていた。4施設が共通して抱える問題として、「患者の生活に着目できていない」「チーム医療が不十分」の2点が挙げられ、その解決策としてICF[*1]（国際生活機能分類）がテーマの研修会を実施したいとJV間で意見が合致した。ICFとは、患者の疾患や障害だけを捉えるのではなく、患者の生活や環境など多くの側面を含めた分類がなされており、日本の医療現場で患者像をチームで包括的に捉えるためのツールとして多く用いられている。

右記内容を北部労災リハ配属の鈴木JVがタイ人の同僚に話したところ、強い関心を示してくれたため、2018年6月に北部労災リハで研修会を開催する運びとなった。講師は、浅海奈津美さん（SV／作業療法士・2016年度2次隊）に依頼。鈴木JVの同僚と、労災リハに派遣中のJV4人[※]と浅海SVが中心となり、ICFとチーム医療に関する講義、グループワークからなる研修会を実施した。

研修後、内容について各配属施設で伝達講習[*2]を実施。狩俣JVの配属先では伝達講習にて「入所者へのイメージが持ちやすい」「同じ目標を持つことは大切だ」と意見があり、患者像の捉え方とチーム医療の意識が変化した。徳田JVの配属先では、ICFを用いた患者会議を定期的に開催することになり、患者も会議に参加することで、実際の生活状況や目標を患者と共有するための良い機会となっている。鈴木JVの配属先では、元々実施していた患者会議にてICFを用いるようになり、この活動を同僚が労働省社会保険事務局主催のSSO Good Practice Awardというコンテストへ応募し、入賞するに至った。

研修会の成功とコンテストへの入賞は、同僚の強い関心と協働意識があったことに加え、同分野で活動するJV間で課題の認識が統一されていた点、さらにSVの協力が得られた点、同系列施設で相互に切磋琢磨できた点などが大いに影響している。また、冒頭の配属先における課題に対し、同僚らのICFへの関心を汲み取り、協働者とともに研修会を実施できたことが、それぞれの成果につながったと感じている。今後も、患者の疾患や障害だけに目を向けるのではなく、生活環境や趣味などの側面も考慮に入れた包括的なリハビリ支援を提供できるように、同僚らとともに活動に取り組んでいきたい。

研修会の参加者と実施者たち。研修会には全労災リハと近隣の病院や施設より27人が参加。講師の浅海SV（当時）、準備・運営を担当した五味JV（当時）、徳田JV、狩俣JV、鈴木JV。現在、浅海SVと五味JVは任期終了

＊1 ICF…International Classification of Functioning, Disability and Health　＊2 伝達講習…外部で学んできたことを関係者間で共有する機会　※五味沙織JV（作業療法士・2016年度1次隊）、鈴木JV、徳田JV、狩俣JV

Uganda

「ナイル川源流橋」の開通を記念した絵画コンテストで教え子が入賞

文 ＝ 鷹觜悠史さん（ウガンダ・小学校教育・2017年度1次隊）

表彰式に参加した児童2人（左端と右から2人目）、配属先の教員2人（中央と右端）、鷹觜さん（左から2人目）

絵画制作の流れ	
〈1カ月前〉参加決定	コンテストの実施について、参加意思表明。
〈1週間前〉事前説明	JICA事務所より、コンテストの趣旨説明および画材の配布。
〈当日〉制作	下書き（2018年9月26～28日）、清書（10月1～4日）。
〈1日後〉提出期限	コンテストに参加する作品を事務所に提出。
〈1カ月後〉結果の通知	賞の名称および受賞者の通知。
〈1カ月半後〉表彰式	ナイル川源流橋にて表彰式の開催。

「JICAの有償資金協力によって建設された『ナイル川源流橋』の開通に合わせて、本事業のPRを目的とした『夢の橋』をテーマにした児童の絵画コンテストを企画しているので、参加しませんか？」とJICA事務所から連絡が来たのが昨年9月。3学期が始まる2週前のことでした。

私の配属先であるムシマ小学校は、ジンジャ県に位置し、橋までの距離は車で20分余り。これまで、算数、体育の授業を行ってきましたが、図工の授業は実施できておらず、「新しい活動に取り組む良い機会に恵まれた」と思い、参加を決意しました。

対象は同僚と相談して5年生～7年生[※]に絞りました。これは、賞を取りたいという配属先の要望と、私の指導している学年という理由からでした。新学期が始まるとすぐに、JICA事務所のスタッフが学校を訪問し、コンテストの趣旨説明と画材の配布を行いました。みんな真剣な眼差しで橋の説明を聞いていました。

手探りの中、事務所スタッフや同僚と相談しながら、まずは普段使い慣れている鉛筆で下書きを描かせました。下書きを終え、担任と相談した結果、各学年から5人を選出しました。

翌週からは急ピッチで清書が始まりましたが、水彩絵の具を初めて使う児童が多いため、混色や水で薄めることの良さをなかなか伝えきれませんでした。同時に、水は青、森は緑と実際の色を使いたがる傾向が強いため、あえて夕焼けや曇天を薦めることで、児童の表現力やオリジナリティが育つように工夫しました。怒涛の4日間を終えて、すべての作品を事務所に提出しました。

約1カ月後に、事務所から「2人の児童が選ばれた」と連絡がありました。早速、配属先に伝えると、大喜びで同僚から握手を求められました。

表彰式には公共事業副大臣、在ウガンダ日本国大使、JICAウガンダ事務所長、UNRA[*]総裁が参加され、私は配属先の教員2人、児童2人とともに出席しました。2人の児童は橋を見るのが初めてだったので、目を輝かせていました。スピーチでは、来賓の前でコンテストに対する児童自身の考えや感謝の気持ちをしっかりと伝えることができ、私も感動をしました。

賞という動機づけはあったものの、児童、配属先を巻き込んでコンテストに応募し、受賞者および参加児童にとってインフラの重要性やJICA事業への理解を向上してもらうための良い機会だったと振り返っています。

児童に配色のアドバイスをする鷹觜さん

※日本の小学5年生～中学1年生　＊UNRA…Uganda National Roads Authority（ウガンダ国家道路公社庁）

社会福祉分野の活動ポイント

障害者福祉や高齢者福祉など社会福祉分野の協力隊活動には、「専門教育を受けていない人に、技術をどうわかりやすく伝えるか」といった共通の難しさがある。ここでは、障害児・者支援とソーシャルワーカーの事例を題材に、社会福祉分野での活動のポイントを整理する。

CASE 1

障害者支援 NGO での活動

PR 活動の活性化にも注力

障害児・者への支援を行うNGOに配属された柏さん。
専門性が不足していた同僚たちに特別支援教育の技術指導を行う一方、
配属先の存在を対外的にPRする取り組みの活性化にも力を入れた。

❶地域のイベントで利用者や同僚と共にパレードに参加する柏さん（左）
❷見本として柏さんが示した授業。アイスの棒を、同じ色を塗ったトイレットペーパーの芯に入れていく。「色の認識」や「選ぶ行為」を学ぶことができるものだ
❸同僚を対象に行った勉強会の様子
❹散歩で落ち葉を拾い、紙に書いた木の枝には緑の葉を、木の下には枯葉を貼り付けていく授業を同僚が発案。「上下」の概念を学ばせる狙いだ

柏さんが配属された財団フンダミセルは、3歳から30歳までの障害児・者に福祉や教育のサービスを提供するNGO。利用者は1日40人ほどで、知的障害者やダウン症患者が中心だ。柏さんの活動の場となった教育サービス部門では、集団行動がどの程度できるかによって利用者を数クラスに分け、授業が行われていた。

着任後の3カ月間は配属先の状況を観察。そこで見つけた課題により、柏さんは「教育サービスの改善」と「PR活動の活性化」を活動の柱とした。

教育サービスの改善

●授業支援

着任当時、授業を担当する同僚たちは高いモチベーションを持っていたが、一方で「専門知識に乏しい」という課題があった。塗り絵など限られたアクティビティが繰り返し行われ、授業内容はマンネリ化。「右左」や「数」の概念がわからない知的障害児にそれを教え込もうとするなど、利用者の障害や発達の程度に応じた対応も行き届いていなかった。

柏さんは同僚たちの授業に入らせてもらい、試しに「障害や発達の程度に応じた対応」の例を示してみた。『物には色がある』という認識を持ってもらうため、色を塗り分けたトイレットペーパーの芯とアイスの棒で同じ色のセットをつくる」という授業だ。そうした柏さんの授業に、利用者たちはそれまでにない反応を見せる。すると同僚たちは要領を掴んだようで、思いついた授業アイデアについて柏さんに意見を求めるようになっていった。

●「保護者面談」の導入

配属先が利用者の保護者と連携が取れていないことに気がついたのは、着任後すぐのことだ。対策として柏さんが最初に試みたのは「連絡帳」の導入。配属先での利用者の様子、家庭でフォローしてほしいことなどを記入し、利用者に持ち帰ってもらうものである。しかし、保護者が目を通している気配はなかなか感じられない。そこで打った次の手は、「保護者面談」という直接のコミュニケーションだ。面談の際には、「壁に案内のカードを貼ってトイレの位置を覚えられるようにする」など、配属先で行っている指導を丁寧に説明し、家庭でも同じことをやってもらうよう依頼。すると、保護者がそれらを実践し、利用者に顕著な変化が見られる例も出てきた。この取り組みは、柏さんの帰国後も継続してもらえるよう、同僚のソーシャルワーカーと共に行った。

PR活動の活性化

意欲的な同僚たちによって教育サービスの質が向上するにつれ、配属先の課題として比重が大きくなってきたのは「資金不足」だ。当時、配属先は行政による補助の対象外であり、資金不足から配属先は存続すら危ぶまれる状況となっていたのだった。そうしたなかで柏さんは、資金面の支援の獲得につなげようと、地域社会に対するPR活動の活性化にも力を入れた。

●イベントへの参加

配属先は以前から、地域で開催される各種イベントに参加することには積極的だったが、参加の頻度や方法には工夫の余地があった。柏さんは手始めに、まだ参加したことのないイベントを調査。すると、それまでは「障害者の特別参加枠」があるイベントばかりに参加していたことがわかった。そうした枠がないけれども、利用者が参加できそうなもののひとつに新規の参加を試みたところ、問題なく完了。「特別枠がないと参加できない」という先入観が払拭された同僚たちの間には、より積極的に地域のイベントに参加しようという機運が高まった。

イベント参加の「方法」についても、柏さんは改善を試みた。事前にダンスのインストラクターを招いて利用者たちを指導してもらい、イベント当日には利用者たちが踊りながらパレードに加わる。配属先外とのつながりを強め、かつ利用者たちの生き生きした姿が見せられるような参加方法だ。すると、イベント当日にマスメディアからインタビューの依頼を受けるなど、地域社会に配属先の存在をアピールできる取り組みとなった。

●外部向け研修会の開催

配属先への支援を検討している地元企業などを対象に、「障害への理解の促進」を目的とした研修会を開催したのも、地域社会と配属先とのつながりを深めるために柏さんが企画したものだ。座学ではなく、障害の感覚を擬似体験してもらうワークショップ型にこだわり、規模の大きさよりも小まめに開催することも心がけた。すると次第に評判が広がり、参加者数も増加。その結果、利用者の施設利用費などを支援する「里親」となってくれる企業や地域の有力者が現れた。この研修会も、当初は柏さんが中心となって運営していたが、やがて同僚たちが柏さんを手本に後に続いてくれたことから、柏さんは資料の作成など縁の下の力持ちへと身を退いていった。

以上のようなPR活動の活性化が功を奏し、障害者支援を行う団体として行政から公認され、補助金の対象となったのは、任期を終えるころ。柏さんの提案する新機軸に積極的に挑戦してくれた同僚たちが、柏さんの帰国後もそれを続けていける可能性が高まった。

柏（かしわ） 萌菜美（もなみ）さんの事例

（コロンビア・障害児・者支援・2016年度1次隊）

Profile

1989年生まれ、静岡県出身。大学法学部の卒業と同時に中学・高等学校の教員免許状を取得。学校などで主に精神障害や発達障害のある児童の支援に従事。2016年6月に協力隊員としてコロンビアに赴任。18年6月に帰国した後、一般企業の教育事業部に勤務する傍ら、社会福祉士の養成校に在学。

活動の概要

障害者支援を行うNGO「財団フンダミセル」（サンタンデール県）に配属され、主に以下の活動に従事。
●授業の支援
●「障害理解」や「特別支援教育」に関する研修会の実施
●利用者と地域とのつながりの構築

事例のポイント！

障害児・者支援に携わる隊員の配属先では、予算不足が課題となっているケースも多いだろう。本事例のように、配属先の対外的なPR活動を外部者の視点で見直し、その新機軸を提案すれば、資金面の支援者の獲得、ひいては配属先の活性化へとつながっていく。

CASE 2

特別支援学校の運営改善

「新製品」と「役割分担制」の導入で生徒の意欲が向上

知的障害児・者が学ぶ特別支援学校に配属された牧さん。
担当した洋裁クラスでは、当初、不得手ゆえに作業に加われない生徒がいた。
そこで牧さんは、「新しい製品」と「役割分担制」を導入した。

まき
牧ちさとさんの事例

（ケニア・障害児・者支援・2016年度1次隊）

Profile

1988年生まれ、鹿児島県出身。鹿児島大学教育学部養護学校教員養成課程卒業後、神奈川県立の特別支援学校に勤務。2014年、JICA教師海外研修（タンザニア）に参加。16年6月、協力隊員としてケニアに赴任（現職教員特別参加制度）。18年3月に帰国後、復職。

活動の概要

シアヤ・カウンティのマランダ特別支援学校に配属され、職業訓練コースで主に以下の活動に従事。

- ●新製品の開発・販売の支援
- ●職業訓練の時間を活用した国語や算数など主要教科の指導
- ●生徒への保健・衛生指導（性教育、身だしなみの指導など）

牧さんが配属されたのは、知的障害のある生徒が通うマランダ特別支援学校。全寮制のこの学校には、5歳から36歳までの生徒約100人が在籍していた。牧さんの主たる活動となったのは、職業訓練コースの洋裁クラスでの授業支援だ。

カウンターパート（以下、CP）の特別支援教員が担当するこのクラスでは、洋裁とペーパービーズのアクセサリーの製作指導が行われていた。「蚊帳の外に置かれている生徒たち」が気になったのは、授業に入るようになってすぐのことだ。CPは、特定の生徒たちだけに製作の指導をし、それ以外の生徒たちには「座っているように」と指示を出す。道具が不足していたうえ、後者の生徒たちは、「はさみでまっすぐに切ることができない」など、工程の一部を苦手としていたからだった。個々の能力に応じて学習を進めることが当たり前となっている日本の特別支援教育の現場との極端な違いに、牧さんは驚くばかりだった。

授業では生徒たちの「集中力の持続」にも課題があった。製作に取り組んでいる生徒も、座っているだけの生徒も、授業開始から10分ほどで「トイレ」などを理由に次々と教室を出て行き、戻ってこない。結果、授業を終えるころに残っているのはほんの数人という状態だった。その点をCPに指摘してみるものの、「行きたいのだから仕方ない」と、問題に感じていない様子だった。

以上の状況から、牧さんは「個々の生徒の能力に応じた学習内容の提供」と、「生徒たちの集中力の持続」を、当面の活動目標に設定した。

「役割分担」の意義をアピール

設定した活動目標を達成する手段として牧さんが選んだのは、「新製品の導入」だった。着手したのは、着任の半年後。市場調査に訪れた町中の市場で、買い物客の女性たちが手にしていた「プラスチックバスケット」が目に留まった。平たいプラスチックの紐で編まれたものだ。牧さんは、それを新たな製作課題として授業に導入できないかと思案。以下のような利点が考えられたからだった。

- ●編み方がそれほど複雑ではない。
- ●「紐を切る」「紐を押さえる」「編む」など、各作業の分担が可能で、生徒たちをそれぞれが得意な作業で製作に参加させることができる。
- ●配属校があるマランダ村ではバスケットは流通していなかったため、村民の需要があると見込まれた。授業で従来つくられていたペーパービーズのアクセサリーは、売れ行きが芳しくなく、在庫が残っていた。

牧さんは早速、CPに授業への導入を提案。前例のない製作課題とのことだったが、快く賛同してくれたうえに、材料の調達役を買って出てくれた。

「役割分担」というやり方については、当初、CPは「できる生徒たちに単独でつくらせるべき」という意見だった。そのほうが良い出来栄えとなり、売れ行きも上がるはずだとの考えからだ。そこで牧さんは、生徒たちにそれぞれの能力に応じた学習のチャンスを与えることの重要性や、役目を与えられたらどの生徒も責任感を持って取り組むため、出来栄えも良くなることなどを丁寧に説明。するとCPは、半信半疑ながらも「役割分担」で進めてくれることを了承してくれた。

バスケットの製作指導を開始した当初は、ひとつ完成させるまでに時間がかかり、CPも「やはり効率が悪いのでは」と不平をもらした。それに対して牧さんは、「あの子はこれまで、作業を始めて10分で教室を出ていっていたけれど、今日は30分取り組めましたね」などと、「小さな変化」を指摘してCPを説得した。

思わぬ追い風が吹いたのは、スタートから半年ほど経ったころだ。法律でプラスチック製のレジ袋の使用が禁じられ、客が「エコバッグ」を持参しなければならない状況となった。それにより、マランダ村の市場でのバスケットの売れ行きが3倍ほどに急上昇。すると、生徒たちも集中して作業に取り組むようになる。作業のやり方について生徒どうしでアドバイスし合ったり、途中で抜け出す生徒をほかの生徒が注意したりと、「生徒間の協力姿勢」すら生まれていった。気がつくと、トイレで教室を出たいときには生徒自身が皆に許可を求め、トイレが済むとすぐに戻ってくるようにもなっていた。そうした変化を目の当たりにしたことで、ようやく「役割分担」の意義に対するCPの疑念は晴れたのだった。

授業で製作したバスケットは、使い込めばほころびも出る。そこに着目したCPから、「生徒たちにバスケットの修理方法も教えよう」と提案があったのは、任期も残り半年となったころだ。家族や近所の人たちが持つバスケットを、生徒たちが自宅で修理してあげられるようになれば、彼らと地域社会とのつながりも深まる。すばらしいアイデアだと牧さんも賛同し、早速授業で修理方法の指導を開始。すると、予想以上の反響があった。バスケットを持っている地域住民たちが、修理の依頼のために自ら配属校を訪問してくれるようになったのだ。

牧さんは着任以来、住民たちから「何をしている学校なのか」と問われることがたびたびあり、配属校と地域社会との間にある「壁」を感じていた。そうしたなか、修理の依頼のために配属校を訪れた住民に対し、自分たちが何を学んでいるのかを誇らしげに説明する生徒たちの姿を見た牧さんは、その「壁」が消え始めたことを実感できたのだった。

❶牧さん（中央）の指導を受けながら、協力してバスケットを製作する生徒たち
❷夢中になって製作に取り組む生徒
❸生徒にバスケットづくりの指導をするカウンターパート（右）
❹修理依頼で配属校に持ち込まれたバスケット

事例のポイント！

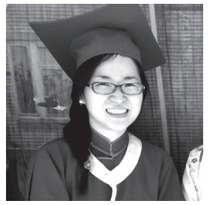
障害児・者の可能性を過小評価している同僚に対し、その認識を改めてもらうためには、「目に見える変化」を生み出すのが最大の方法。そうした変化をもたらしやすいかどうかという観点で新たな授業内容を見つけ出すことが、特別支援教育分野の活動のカギのひとつだろう。

CASE 3

大学でのソーシャルワーカー育成

実習先の開拓により、高齢者福祉分野の可能性を拡大

大学のソーシャルワーカー養成科で授業を担当した小野さん。
平均寿命が低いために注目されてこなかった高齢者福祉分野の授業では、
高齢者施設での実習を導入するなど、実践的な内容となるよう努めた。



小野由貴（おのゆき）さんの事例

（モンゴル・ソーシャルワーカー・2016年度2次隊）

Profile

1986年生まれ、岡山県出身。川崎医療福祉大学で社会福祉士の資格を取得。卒業後、医療機関にソーシャルワーカーとして7年間勤務。その後退職し、16年10月に協力隊員としてモンゴルへ赴任。18年10月に帰国。

活動の概要

ドルノド県にある国立ドルノド大学に配属され、ソーシャルワーカー養成科で主に以下の活動に従事。

- ●授業の実施
- ●学生の課外活動や実習への同行
- ●日本の大学のソーシャルワーカー養成カリキュラムの紹介
- ●日本語クラブの実施

小野さんの配属先は、国立大学のソーシャルワーカー養成科。30人ほどの学生に対し、3人の教員が授業を担当していた。ここで小野さんに期待されていたのは、ソーシャルワーカー（以下、SW）に関する日本の理論や事例を紹介し、同科の授業内容の充実化を図ることだった。

小野さんが手始めに取り掛かったのは、授業を組み立てるために必要な情報の収集。同僚たちの授業を手当たり次第に見学させてもらった。すると、授業の大半が「理論の説明」に当てられていることがわかった。モンゴルの教育現場では一般に、実践的な技術よりも、理論を教えることが重要視されているのだった。

「理論の説明」をするためには、授業で使うモンゴル語で専門用語がどう表現されるのかを知らなければならない。その手段として有効だったのは、同僚たちとの「お茶の時間」。その時間を利用することで、彼らに負担をかけることなく、専門用語を教えてもらうことができたのだった。「お茶の時間」は同時に、同僚たちの要望を聞き出し、それに対して小野さんができることを伝える場にもなり、小野さんは徐々に同僚たちの授業を部分的に担当させてもらえるようになっていった。

障害児・者分野の講義を担当

単独で授業を担当させてもらえるようになったのは、任期の折り返し地点を過ぎたころだ。同僚や学生が求めていたのは、「児童福祉」や「障害者福祉」に関する情報。両分野について、「特別支援学校」や「障害者手帳」など日本の制度を知りたいという声が多かった。しかし、小野さんの前職は、病院に配置される「医療ソーシャルワーカー」。対象者の大半は高齢者であり、「児童福祉」や「障害者福祉」は畑違いだった。小野さんは試しに授業で高齢者福祉について話してみたが、学生ばかりか同僚たちでさえ、それを学ぶ意義を疑っている様子だった。現地の平均寿命は日本ほど長くないため、高齢者福祉は馴染みの薄い分野だったのだ。

小野さんは止むを得ず、必死に勉強しながら「児童福祉」や「障害者福祉」の授業を開始する。しかし、知識の薄い分野の理論を、モンゴル語を使って説明するのは容易なことではなかった。

小野さんが悪戦苦闘するなか、見かねた同僚から助け船が出された。「写真や動画を活用したらどうか」という提案だ。そこで小野さんが取り入れたのは、貧困家庭の児童を支える日本のSWの紹介動画。児童が持っていた大人への不信感が、SWとかかわるなかで消えていくという内容だった。

小野さんはその動画を見せた後、「SWはどのような姿勢で対象の子どもの話を聞いていたか？」と学生たちに問いかけ、彼ら同士で意見交換をする時間を設けた。SWの仕事の現場では、同僚たちが教える「理論」だけでなく、「相手の話に耳を傾け、その状況を把握する」など、実践で鍛えられていく「技」も重要であることを、学生たちに伝えたかったからだ。

この問いかけに対する学生たちの意見から、小野さんが言わんとすることが理解されたことがうかがえた。一方、授業を見学していた同僚たちには、「学生どうしで意見交換させる」という、彼らが取り入れていなかった方法に関心を持ってもらうことができた。

高齢者施設の現場実習へ

通信教育部の学生を対象に、「高齢者福祉」の授業を開講してもらえる運びとなったのは、任期も残すところ半年となったころだ。小野さんの知見を生かそうという同僚たちの計らいによるものだった。

身寄りのない高齢者が暮らす施設が地域にひとつだけあるという話は、以前から同僚に聞かされていた。小野さんはその施設での実習を開講した授業に導入。「実習」も、同僚たちが行っていない教育方法だった。

実習で課題としたのは、「入所者のアセスメント（状況の把握）」。日本の高齢者福祉の現場では、対象者へのヒヤリングなどをもとに把握した体や精神の状態、家族の背景などを「アセスメントシート」と呼ばれる用紙に記入し、対象者が抱える問題点を整理するという方法がとられている。モンゴルの高齢者福祉の現場では行われていなかった方法であったことから、小野さんはその要領の指導に力を入れた。

当初、学生たちはアセスメントをやる意義には半信半疑の様子だった。しかし、アセスメントとして利用者たちへのヒヤリングを重ね、入所者たちの問題が明確になってくると、学生たちは自発的に「この入所者には、もっと動きの簡単な体操を教えてはどうか」など話し合いを行うようになっていった。そうして学生たちに、この実習でも「相手の話に耳を傾け、その状況を把握する」という「技」の重要性を実感してもらうことができたのだった。

それまで外部との接触がほとんどなかった実習先にとっても、学生の受け入れは良い刺激となったようで、学生が開いた体操教室には、関心を持って参加する職員の姿も見られた。実習に同行した同僚も、「施設側が了承すれば、今後も実習や交流を継続したい」と宣言。そうして小野さんの授業が契機となり、現地の高齢者福祉に新たな道筋が付いたのだった。

事例のポイント！

提案のやり方次第では、社会福祉に関して現地の人が持っている固定観念に風穴を開けることができる。本事例では、大学教育で隊員が導入した実習が、それまで現地で注目されていなかった「高齢者福祉」を活発化させる契機となった。

❶❷高齢者施設での実習の様子。❶は、学生と利用者の交流を目的に、モンゴルの伝統的なゲーム「シャガイ」をしているところ。❷は、学生たちが提案し、みずから主体となって行った体操教室
❸小野さん（右）による授業の様子。通信教育部の学生を対象に、障害者支援に関する制度を説明している

協力隊技術顧問が回答

活動Q&A集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

回答者
滝坂信一（たきさかしんいち）さん
●JICA海外協力隊技術顧問
（担当分野: 障害者支援）
●元帝京科学大学教授

Q1 専門性がない方々への指導の方法について

幼稚園で活動する障害児・者支援隊員より

配属されている幼稚園には特別支援学級が設けられており、脳性麻痺や知的障害の子を受け入れています。しかし、派遣国には特別支援教育を専門とする教員はおらず、配属先の特別支援学級も保護者のひとりが教員役を務めています。その保護者には教員の経験はなく、私が着任した当時、教育的な活動はいっさいなされていませんでした。

この保護者に特別支援教育の知識を提供しても、やがて交替の時期がやってきます。そこで私は、配属先の教員全員に特別支援教育の知識を提供し、統合教育の可能性を含めて、園全体で障害児に対応していく体制を導入したいと考えています。

特別支援教育の専門性がまったくない方々にそれを指導するうえで、どのような点に注意すれば良いでしょうか。

Answer

障害のあるひとの困難は、周りのひとが「あまりにも当たり前であるために自分が前提としていることに気づかず、その前提を押しつける」ことから生じます。立場を変えると、これは周りのひと、特に一緒に暮らす家族の困難でもあります。「なぜこれがわからないのか」、「何を考えているかわからない」、といった思うようにならないストレスを感じ、障害のあるひとにそのイライラをぶつけてしまうことが少なくありません。

保育や教育における「障害」に関する一次的な専門性とは、そういった前提にたたず、その子どもの内的な過程を理解し、その子の日常生活における健康、生命の維持についての配慮、コミュニケーション方法がわかり、成長発達に見通しをもってそれに資する実際の対応ができるということ、そのことについて他者の理解を促すということです。

その意味で、任地の人々が障害のある子どもたちの心の動きについて「あ、そうか」と気づくこと、そして障害のある子どもとの関係を築き、成長発達にかかわることについてもっと工夫してみようという気持ちになることがとても大切です。そのように感じられる場面を示すことができれば、「知っていることを教えてくれないか」と隊員に求めてくるでしょう。他方、そのような動きを阻害する要因も必ずあります。最大のものは「従来の考え方や、やり方を変えるのは面倒だ」、「今までのやり方で大きな支障はない」という考え方です。これは万国共通で日本においても例外ではありません。

因みに、特別支援学級は幼稚園のなかでどのような位置にあるでしょうか？　また担当している保護者はその仕事にやりがいを感じているでしょうか？　特別支援学級の担任がやりがいを感じて実践を行い子どもたちが生き生きと幼稚園生活を送る、そして魅力的な実践が広がり幼稚園全体によい影響をもたらしたら素晴らしいですね。それが、隊員の提供できる何よりもの「専門性」かもしれません。

Q2 専門にとらわれない活動の実践について

保育園で活動する障害児・者支援隊員より

私の配属先は、貧困家庭の乳幼児全般を支援する国の機関であり、所管する保育園は対象を障害児に特化しているわけではありません。そのため、私自身も特別支援教育に特化した活動ではなく、保育園全体の課題解決に取り組むべきではないかと感じています。

たとえば、保育園のスタッフたちにはすでに保育に関する専門知識がある程度備わっており、それを増やすワークショップなども行われています。しかし、「子どもとのコミュニケーションが少ない」「子どもに関する情報共有がなされない」「園内が整理整頓されていない」など、基本的なことが実践されていません。

以上のような状況のなか、現在、活動計画を立てるうえで自分の専門性にどの程度こだわるべきかについて迷いがあります。大きな方向性について何かアドバイスをいただけますでしょうか。

Answer

はじめに、隊員にとって、任地では実践されていないとする「基本的だと思われること」について考えてみましょう。

日本で「子どもとのコミュニケーションを大切にする」のは、コミュニケーションを通じて、「自分が大切にされているのだ」、ということを子どもが感じ、気持ちが穏やかに保たれ、健やかに育つという考えがあるからではないでしょうか。また、スタッフが「子どもに関する情報を共有する」のは、「皆で力を合わせ、子ども一人ひとりを大切にして保育にあたる必要がある」、という考えがあるからでしょう。さらに、「園内を整理整頓する」のは、それによって子どももスタッフも、すがすがしい気持ちで過ごすことができるとの考えからでしょうか。これらはいずれも、日本という社会の文化において大切にされている、日本における「基本的な」ことです。

では、任地において「基本的」とされていることは何でしょう？

そのことをスタッフや関係者から知り、これに対して隊員自身にできると感じることから実践し、その姿を見てもらうこと。次に、それに関心をもったスタッフを誘って、一緒にやってみるのはどうでしょう。その際、子どもたちが隊員に対して表す表情や変化は、大きな勇気を与えてくれるはずです。そして、「保育園のスタッフたちには、すでに保育に関する専門知識がある程度備わっている」とすれば、隊員の行う様子に心を動かされる保育者が必ずいます。「ていねいなコミュニケーションが、子どもとの関係にどのような影響をもたらすのか」、をテーマにワークショップを行うこともできるかも知れません。

そういったなかで、これまでは保育の対象となってこなかった、「地域に住む、障害のある子どもを受け入れるためにできる一歩」を、考え取り組んでみる。そこで隊員から出てくるアイデアには、これまでの経験のなかで培われてきた「専門性」が必ず含まれています。そしてそれは、任地での新しい環境での活動を通じて、より洗練されるはずです。

保育の充実と保育における障害のある子どもへの対応は、一つにつながっていることです。私には、配属先が大きな可能性のあるところだと感じられます。任地での取り組みは、帰国後の仕事にも必ず生かすことができます。

特集2 活動の“CHECK”

任期中の折々に、それまでの活動を振り返って効果をチェックし、やり方の改善につなげていくPDCAサイクルは、活動をより有意義なものとするためには不可欠だ。しかし、「人を育てる活動」など、短期間の効果を客観的に測ることがかならずしも容易ではない活動タイプもある。本特集では、各種タイプの活動でそれぞれどのような「チェック」の方法があるか、事例を通して整理する。

1 河村さんが任地で行った活動最終報告会の会場では、ルータ・エスコンディーダの地域ブランドとして認定された農産加工品を生産者たちに披露してもらった。写真の生産者が手にしているのは、ブランドのロゴマークがあしらわれた認定証
2 ルータ・エスコンディーダの地域ブランドとして認定されたレモンのジャム（左）とミカンのジャム（右）
3 河村さんが住民グループと共に企画した観光ツアーで、目玉とした教会見学を楽しむ観光客たち

CASE 1

協働のCHECK

「毎週のミーティング」を軸にカウンターパートと協働

県庁に配属され、農村開発の支援に取り組んだ河村さん。カウンターパートと協働で取り組んだ地域ブランドを立ち上げるプロジェクトでは、進捗をチェックし、当面の計画を確定するミーティングを重視した。

かわむらみさ
河村美沙さんの事例
（エクアドル・コミュニティ開発・2016年度1次隊）

河村さん基礎情報

PROFILE

1988年生まれ、愛知県出身。大学卒業後、映像機器メーカーに営業職で勤務。2016年7月、協力隊員としてエクアドルに赴任（現職参加）。18年7月に帰国し、復職。

活動概要

ピチンチャ県の県生産支援振興課に配属され、農村地域で主に以下の活動に従事。
- 特産品を地域ブランドとして認定するプロジェクトの支援
- 特産品の販売促進支援
- 農家を対象とした農産加工品づくりの研修会の実施
- 観光振興に取り組む住民グループの結成と活動支援

首都キトがあるピチンチャ県の県庁生産支援振興課に配属された河村さん。生活と活動の場となったのは、「ルータ・エスコンディーダ」と呼ばれるキト市内の農村地域だ。そこで地域開発を支援することが、河村さんに求められていた活動だった。

着任当時、配属先には「地域開発」という目標はあるものの、その切り口については、「農産物の付加価値付け」や「観光振興」など漠然としたアイデアしかない状態だった。しかも、カウンターパート（以下、CP）や住民は「お任せ」の意識が強い。そのため、現地のリソースで実現可能な活動の構想や、活動協力者の獲得には時間を要したが、任期の半ばになっていくつかの活動が軌道に乗り始める。任期中に取り組んだ主な活動は次のとおり。

❶既存の農産加工品を地域ブランドとして認定するプロジェクト

活動地域では以前から、自作の農産物の加工品をつくり、販売している農家がいた。「ミカンのワイン」や「レモンのジャム」、「サツマイモのパン」などだ。そうした特産品のプロモーションを行政の立場で後押しする目的で、ルータ・エスコンディーダの地域ブランドを創設。河村さんの任期中に10の農産加工品を認定した。

❷新規農産加工品の提案

農産加工品づくりを行っていなかった農家を対象に、それまで地域でつくられていなかった品目を提案する研修会を実施。果物を素材とするアイスクリームやグミなどだ。

❸観光振興に取り組む住民グループの結成と活動支援

活動地域の神父をリーダーとして住民グループを結成し、教会見学や特産品販売、伝統ダンスの披露などを組み合わせた観光ツアーを企画。週に3組程度の団体客を受け入れるほどのビジネスになった。

綿密な計画を立てたものの

以上の活動のうち、CPと共に取り組んだのは❶のプロジェクトだ。彼は仕事に意欲的だったが、ピチンチャ県全域を担当していたため、河村さんの活動地域に足を運べるのはせいぜい月に1度程度。そこで、配属先自身が実現を望んでいた❶に限り、CPとの協働に挑戦することにしたのだった。

河村さんは当初、1年程度の長期スパンで計画を立案。「住民説明会の開催」や「ロゴマークのデザインの依頼」など必要なタスクを列挙したうえで、それらをいつ、誰が、どのようにやるかをあらかじめ明確にしておいた。

そうして着任して半年ほど経ったころに、プロジェクトをスタートさせる。しかし、見込みが甘かったことをすぐに痛感する。CPが勤務する配属先のオフィスは、河村さんの住まいからバスで2時間ほど。そのため、プロジェクトの進捗状況をチェックし、進め方の改善を図るためのミーティングを行えるのは、1カ月に1度というペースだった。そのチャンスに進捗状況を確認すると、彼が予定していたタスクをやっていなかったり、計画とは違う方向で事を進めてしまっていたりということが頻発したのだ。

苛立ちを募らせた河村さんは、CPのタスクを代わりやってしまわずにはいられなくなる。そうして気がつくと、「協働」の姿からはかけ離れてしまっていた。

このままでは、自分の帰国後に地域ブランドの取り組みは担い手の不在で消滅してしまう。河村さんのそんなジレンマは強く、任期の半ばにはストレスで体調を崩してしまった。ところが、それが活動をあらためて見つめ直すチャンスとなった。

毎週日曜日にバスで上京

長期の計画を綿密に立て、それに則って行動することは、現地の人たちには慣れないやり方。にもかかわらず、自分自身が「安心感」を得たいがために、日本での仕事で慣れ親しんでいたこのやり方をCPに強要してしまっていたのだ――。そう反省した河村さんは、CPとの協働を次のような形に変更した。

- 立ててあった長期の計画については、河村さん自身は引き続き念頭に置いておくものの、いったん脇に置き、CPとの間では話題に出さない。
- その代わりにミーティングの頻度を増やし、毎週月曜日に行う。そこで前週の進捗状況をチェックすると共に、「その週の綿密な計画」と「翌週以降のおおまかな計画」という「短期スパン」の計画を立てる。

CPは、会議で席を外していたり、外勤に出ていたりすることが多く、ミーティングの時間を取ってもらうのも容易ではなかった。そこで河村さんは毎週、日曜日のうちに配属先のオフィスがある市の中心部にバスで移動して宿泊し、翌月曜日には朝一にオフィスに出て、CPの時間が空くのを待った。それでも当初は、「積極的に時間をつくろう」という意識をCPに持ってもらえず、ミーティングが実現しないまま一日が終わってしまうこともあった。対して河村さんは、「今日はあなたと話すためだけにここに来た」「15分だけで構わないので話すことが必要」などとしぶとく食い下がる。「明日なら空いている」と言われた場合には、その晩も近所に宿泊し、翌日出直すこともあった。

「わずかな時間の話し合いのために、これだけの労力をかけるのは妥当だろうか？」。そんな不安を感じることもあったが、河村さんは「これも活動のひとつ」と考え、なんとか週1回のペースを維持し続けた。

こうした努力の効果は次第に顕著になっていった。予定していたタスクができなかったときも、すぐに挽回の手が打てるため、進捗の滞りも解消。また、新たに判明した状況を、すぐに以後の計画に反映させることもできるようになった。そうした変化をCPも実感。やがて「こうやってミサと話をすることは大切だ」と口にするようになり、みずから「今日は何時にミーティングをやろう？」と声をかけてくれるようにまでなったのだった。

POINT

ミーティングは努力して開く！

「計画的な行動」を苦手とする現地の人と協働で活動を進める場合、必要な作業の抜け落ちを防ぐためには、進捗のチェックをこまめに行うことが必要となる。そこでカギとなるのは、「協働者とミーティングをするチャンスをどのようにつくるか」だろう。

CASE 2

授業のCHECK

宮野幸恵（みやのゆきえ）さんの事例
（ソロモン・PCインストラクター・2016年度2次隊）

生徒の上達度合いを測る「定期テスト」を改良

職業訓練校に配属され、パソコンの授業を担当した宮野さん。授業のわかりやすさを測る指標ともなる「定期テスト」に工夫を凝らすなどしながら、自身の授業の改善を進めていった。

宮野さんが配属されたのは、カトリック系の職業訓練校。「建築」や「自動車整備」など6科が設けられた3年制のコース（職業訓練コース）と、「パソコン」と「溶接」の2科が設けられた2年制のコース（スキルアップコース）があり、両コースとも最終学年は企業実習を行うこととなっていた。いずれの科も、30人前後のクラスが1学年に1つずつ。宮野さんの赴任当時、所属するIT部門の教員たちで運営していた授業は次の3種だ。

❶職業訓練コースの1年生を対象とした、パソコンの基本操作を教える授業（名称は「ベーシックコンピュータ」）
❷職業訓練コースの一部の科の2年生を対象とした、CADソフト*の基本操作を教える授業
❸スキルアップコースのパソコン科の授業

配属校は4学期制で、年度の開始は1月。2016年の10月に着任した宮野さんは、17年度の1学期からCADソフトの授業（❷）を担当したほか、翌2学期からは「ベーシックコンピュータ」（❶）も担当するようになった。

「ベーシックコンピュータ」については、配属校に年間授業計画があったことから、それに則って授業を進行。一方、CADソフトの授業には年間授業計画がなかったが、かつてこれを担当した外国人ボランティアがスライド資料を残していたため、当初はそれを活用して授業を進めていった。

定期テストを改良

職業訓練校の目標は、指導した技術によってより良い就職が叶うこと。そのため、「卒業生がどれくらい希望に近い職に就くことができたか」というデータは、授業の良し悪しをチェックする明快な指標だろう。しかし、宮野さんは教え子たちの卒業を待たずに任期終了を迎えたため、自分の授業が生徒の就職にどのように結びついたかを任期中に知るチャンスはなかった。

そうしたなか、宮野さんが自分の授業の良し悪しをチェックする指標としたのは「定期テスト」だ。CADソフトの授業や「ベーシックコンピュータ」では、担当教員が学期ごとに成績を付け、生徒が所属する科に提出することとなっていた。宮野さんは、成績付けのために定期テストを実施。その結果を指標に、自分の授業が生徒にとってどれくらいわかりやすいものだったかをチェックしていった。

宮野さんはこの定期テストにつき、生徒のスキルがより正しく測れるものへと改良を重ねた。当初は、それまで「ベーシックコンピュータ」で行われていたやり方を踏襲して、学期末にペーパーテストを実施。しかし、この方法には次のような難点があった。

- ●ペーパーテストでパソコンスキルの上達度合いを測るのは難しかった。
- ●学期の前半に行った授業の内容は、多くの生徒が忘れてしまっていた。
- ●授業やテストで使う言語は英語だったが、生徒たちは英語が不得意。そのため、問題文の意味が伝わらないことも多く、その都度口頭で追加説明をしなければならなかった。
- ●宮野さん自身が英語に慣れていない時期に、生徒たちにわかりやすい問題文をつくるのは時間がかかった。
- ●生徒が所属する科に成績を提出しなければならないのは各学期の終了時だったが、教え子は150人ほど。期末にペーパーテストを行い、期限までに採点を終えるのは困難だった。

宮野さんは以上を踏まえ、翌学期からはCADソフトの授業と「ベーシックコンピュータ」の両方で定期テストを次のように変更した。

- ●ペーパーテストを実技試験に変え、採点はその場で行う。
- ●期末だけでなく、中間にも行う。

このような変更により、生徒のスキルの上達度合いがより正確に測れるようになったうえ、宮野さんの負担も軽減。さらに、導入した「中間テスト」が生徒自身の復習の機会にもなり、学期前半の授業で教えたことも生徒に定着するようになったのだった。

定期テストを重ねてわかったのは、授業で教えたスキルはほぼ身に付いているということ。そうして「教える方法」については問題のないことが確認できたが、「教える内容」の妥当性をどうチェックするかについては、依然として模索が続いた。

「狭く深い授業」への転換

前述のとおり、生徒たちの「就職状況」を自分の授業にフィードバックするチャンスはなかったが、17年度の終わりごろ、宮野さんはそれに代わる手段であらためてCADソフトの授業の「内容」をチェックした。現地の企業を回ってCADソフトが実際にどのように使われているかを確認し、授業で教えるスキルの取捨選択をしたのだ。回った企業は、建築会社など4社。CADソフトを使っていると思われる企業を電話帳で探し、見学を申し込んだ。訪問先で尋ねたのは次のような事柄だ。

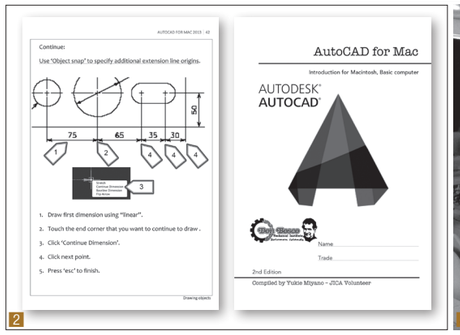
- ●CADソフトをどのような業務で使っているか。
- ●CADソフトでどのような図面を描いているか。
- ●CADソフトのどのようなツールを主に使っているか。
- ●今の業務で必要なCADソフトの基本的なスキルは何だと思うか。

この企業訪問でわかったのは、日本とは異なり、ソロモンでは限られたツールだけで図面を描く方法が取られているということ。振り返ると、宮野さんの17年度の授業は「広く浅い」ものとなっており、不要なツールの使い方などにも時間を割いてしまっていた。

宮野さんはこの反省を18年度の年間授業計画に反映した。教えるツールは、ソロモンで必要なものに限定。それらの使い方を1学期だけで一気に伝授し、残る学期でたっぷりと図面づくりの実習にチャレンジさせる。そんな「狭く深い」授業への変更だった。

宮野さんは、新たに組んだCADソフトの授業の年間計画をもとに、それまで配属校にはなかった「教科書」を作成。CADソフトを使う仕事に就くことができた生徒たちが、業務のなかでわからないことが出てきたときに参照してもらおうとの意図からだ。

＊CADソフト…コンピュータによる設計（CAD／キャド）のためのソフトウェア。



1 CADソフトの授業を行う宮野さん（左）。2つあったパソコン室の一方には、24台のiMacが設置されていた
2 宮野さんが作成したCADソフトの授業の教科書
3 Windowsのパソコンが25台設置されたパソコン室で宮野さんが行った「ベーシックコンピュータ」の授業

宮野さん基礎情報

PROFILE

1984年生まれ、千葉県出身。ホテルに勤務する傍らで建築の専門学校に通い、その後8年間、建築設計に携わる。2016年10月、協力隊員としてソロモンに赴任。18年10月に帰国。

活動概要

首都ホニアラにあるドンボスコ職業訓練校に配属され、主に以下の活動に従事。
●CADソフトの基本操作を教える授業の実施（OSはmacOS、ソフトはAutoCAD）
●パソコンの基本操作を教える授業の実施（OSはMicrosoft Windows）

POINT

「実用性の高い技術」を調査！

職業訓練校で授業を行う場合、教える技術が現地で実用性の高いものであることが大切。いずれかの時点で企業訪問などを行い、指導分野に関してあらためて「現地で実用性の高い技術」をリサーチすることも有益だろう。

CASE 3

研修会のCHECK

アンケートとモニタリングで研修会の効果をチェック

視学官事務所に配属され、小学校での図工授業の活発化に取り組んだ酒井さん。現地教員を対象に研修会を開催した後は、その効果をアンケートとモニタリングによってチェックした。

酒井（さかい）ひかりさんの事例
（ベナン・小学校教育・2016年度1次隊）

市の視学官事務所に配属された酒井さん。小学校で実技教科の活発化を支援するという要請内容だったが、図工に的を絞って活動した。酒井さんの着任当時、ベナンでは十数人の隊員が教育分野で活動。彼らの多くは図工授業の活発化に力を入れており、分科会活動として図工授業の教員用指導書も作成していた。この指導書が活動の糸口になると感じたことなどから、酒井さんも図工を活動のメインとすることにしたのだった。

配属先が所管する小学校を回り、図工授業の様子を確かめることから活動をスタートさせた酒井さん。すると、時間割に組み込まれているにもかかわらず、「主要教科のほうが重要」との考えから図工授業を実践していない教員が大半であることがわかった。実践していた教員も、アクティビティの引き出しは少なく、「実物に似せて絵を描かせる」といった授業に限られていた。

そうしたなか、酒井さんがメインの活動場所とする学校を3校に絞ったのは、着任から半年あまり経ったころ。分科会が指導書を完成させて間もない時期だった。3校にはいずれも図工授業への関心の高い教員がいたことから、酒井さんは彼らをいわばカウンターパートに見立てて活動。酒井さん自身が授業を実践してみせたり、現地教員たちに指導書を使いながら授業に挑戦してもらったりした。

以上のようなモデル校での活動の傍ら、週に2日は他校への巡回を継続し、図工授業の実践に向けたアドバイスを行った。そうした巡回活動のテコ入れとして、モデル校以外の学校の教員も対象に含めた図工授業の研修会を、任期中に2回実施。概要は次のとおりだ。

【第1回】
- ●時期／着任の約1年後
- ●受講者／市内全域の教員有志（約400人）
- ●日程／同じプログラムを、対象者を入れ替えて半日ずつ実施
- ●プログラム／すでに図工授業を実践していた現地教員たちによるモデル授業。受講者を児童に見立て、分科会が作成した指導書（オリジナル版）を使いながら「切り紙」や「折り紙」の授業を行ってもらった。分科会のメンバーたちにも、教壇に立つ現地教員のフォローをしてもらった。

【第2回】
- ●時期／帰国の約1カ月前
- ●受講者／配属先に近い小学校6校の全教員（約40人）
- ●日程／半日
- ●プログラム／酒井さんが実質的なカウンターパートとしてきた教員が、受講者を児童と見立てたモデル授業を実施。分科会が作成した改訂版の指導書を使いながら、「段ボールのクリスマスツリー」や「教室飾り」をつくる授業を行ってもらった。

事後のモニタリングも実施

初回の研修会の開催にあたっては、立てた計画が現地に合っているかどうかを確かめるため、事前に配属先の上司に相談。「平日でないと参加者は集まらない」といったアドバイスをもらい、それらを踏まえて実施した。さらに、研修後にも会場で受講者に感想を問うアンケートを実施し、研修会の良し悪しをチェックする指標とした。盛り込んだ質問事項は以下のとおり。

❶時間の長さの妥当性（選択式）
❷進め方の妥当性（選択式）
❸図工授業を大切だと考えているかどうか（選択式）
❹その他（自由記述式）

研修会の「方法」については、❶と❷の質問で不満の声はなかったものの、❹では「インセンティブ」に関する不満が多く記されていた。「手当」や「交通費」、「昼食」が出なかったことの指摘だ。それを踏まえ、2回目の研修会では、受講者の人数も多くなかったことから、会場となった学校の給食をその日は余分につくってもらい、研修後に提供することとした。

一方、アンケートでは、モデル授業で行ったアクティビティの難易度や興味深さなど、研修会の「内容」に関することについては、改善すべき点の指摘は皆無。反対に、「同じような研修会をまたやってほしい」など、高く評価する声が多かった。第2回の研修会を開催したのは、そうした声も踏まえてのことだった。

アンケートでは内容を高く評価してもらえたが、研修会の目的は、あくまで受講者に図工授業を積極的に展開してもらうこと。酒井さんは初回の研修会の後、受講者たちの勤務校を回って図工授業の実施状況を調査。すると、研修会をきっかけに実践し始めた教員もおり、研修会の「内容」が妥当だったことが確認できた。新たに図工授業に挑戦し始めた教員がいる学校には、以後もたびたび足を運び、授業の引き出しを増やすためのフォローを行った。

「評価」の「比較対象」

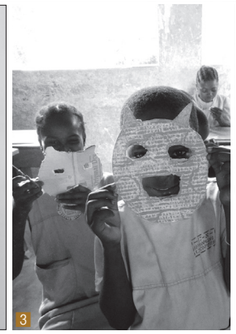
アンケートによって活動に関する評価を現地の人に尋ねる場合、「比較対象」の有無によって、回答の質はおのずと異なってくる。酒井さんが行った研修会の受講者たちは、「研修会」自体は経験したことがあったため、研修会の「方法」については不満な点を具体的に挙げることができた。一方、「図工授業」は大半の受講者が未経験だったために、研修会の「内容」についての具体的な指摘を挙げることができなかった可能性もある。

こうした見方の裏付けともなるのが、指導書に関して実施したアンケートの結果だ。分科会のメンバーは指導書のオリジナル版が完成すると、それぞれ任地で少なくとも3人の教員に指導書の実物を渡し、感想を尋ねるアンケートに回答してもらった。その際、すでに作成していた「改訂版」のサンプルも渡し、「オリジナル版と改訂版のどちらが良いと感じるか」という質問も盛り込んだ。すると、オリジナル版の感想を尋ねる質問には「良い」という回答ばかりだったが、改訂版のサンプルと比較した感想を尋ねる質問には、「改訂版のほうが良い」という回答が多数という結果に。「比較対象」があって初めて良し悪しの評価ができることが明らかになったのだった。

POINT

アンケートだけでは不完全！

隊員が実施する研修会の評価を受講者に尋ねても、相手に「比較対象」となる研修会の経験がなければ、具体的な指摘は出にくい。そうした場合は、「事後のモニタリング」などと合わせて効果をチェックすることが必要だろう。



1 酒井さんが実施した初回の研修会で、児童役となって切り絵に取り組む現地教員たち
2 教育分野の分科会でつくった図工授業の教員用指導書（改訂版）
3 酒井さんの活動先小学校の児童たち。手にしているのは、図工授業で製作した紙のお面
4 写真1と同じ研修会で、仕上げた切り絵の作品を手にする現地教員たち

酒井さん基礎情報

PROFILE

1994年生まれ、石川県出身。大学卒業後の2016年6月、協力隊員としてベナンに赴任。18年6月に帰国。

活動概要

プラトー県サケテ市の視学官事務所に配属され、小学校の図工授業に関する主に以下の活動に従事。
- ●授業の実施（現地教員との協働）
- ●現地教員向け研修会の実施
- ●教員用指導書の作成・改訂（他隊員との協働）
- ●作品展の開催

CASE 4

OJTのCHECK

患者の「体の変化」と「声」を指標に同僚の技量を評価

総合病院で同僚を対象に理学療法の指導に携わった後上さん。同僚の治療が終わると、後上さんがその患者の回復度合いを測定するという地道な方法で、同僚の技量を確認していった。

後上正幸（ごがみまさゆき）さんの事例
（モンゴル・理学療法士・2016年度1次隊）

後上さんが配属されたのは、モンゴルの地方部に位置するドルノド県の保健行政機関。同国では2007年に理学療法士の資格が創設されたが、まだその数は少なく、特に地方部では依然として不足している。そうしたなかで後上さんの活動の中心となったのは、配属先が所管する総合病院のリハビリテーション科で自ら患者に理学療法を行うこと。さらにその傍らで、同科の同僚たちを相手に理学療法の技術指導も行った。指導の対象となった同僚は、主に次の2人だ。

●理学療法士の資格を持つ20代の女性（以下、Aさん）。後上さんの任期の半ばに産休に入った。

●運動指導の専門性を持つ20代の男性（以下、Bさん）。産休に入ったAさんの替わりに他部署から異動してきた。理学療法については素養がなかったが、同国では彼が持つ専門性でも理学療法に携わることが認められていた。

同僚たちへの技術指導の方法は、実際に患者に対する理学療法を進めながらアドバイスを行うOJT（On-the-Job Training）がメインだ。

マンパワー活動のチェック

日本でもモンゴルでも、理学療法は医師が書く指示書に従って治療を行わなければならないことになっている。そのうえで、理学療法士自身が絶えず治療効果をチェックし、治療方法の細部（手技の力の入れ方など）の見直しを図っていくということが、日本では徹底されている。後上さんは、自身が患者の治療を行うマンパワーとしての活動に関しては、日本で行っていた以下のようなやり方で絶えずその効果をチェックした。

●「座位をどの程度保持できるか」といった患者の能力を、観察によって確認する。

●「関節がどの程度曲がるか」といった患者の能力を、計測によって確認する。

●治療に対する患者自身の満足度（「痛くないかどうか」など）を、問診によって確認する。

以上のようなやり方で確認した情報は、リハビリテーション専用のカルテに記録。それにより、患者の状態の変化が可視化され、行っている治療方法の良し悪しをより適切に判断できるようになる。モンゴルにはこのリハビリテーション専用のカルテをつくる習慣がなかったため、後上さんは先輩隊員が作成したモンゴル語版のフォーマットを使った。

技術指導の活動のチェック

理学療法士の資格を持つAさんは、治療手技の技術はある程度の基礎ができていた。課題だったのは、「絶えず治療効果をチェックし、治療方法の細部の見直しを図っていく」というプロセスが欠落していた点だ。その解決策になり得ると後上さんが考えたのは、リハビリテーション専用のカルテの導入だ。「カルテに記載する」という「アウトプット」の機会がないから、「治療効果をチェックする」という「インプット」もなおざりになってしまう。さらに、治療効果のチェックが不十分であるから、治療効果の見直しもやりようがない――。

そうして後上さんはAさんに対し、治療手技の技術だけでなく、カルテの活用の指導にも力を入れることにした。この指導の効果をチェックする方法は、こまめな「観察」以外にない。後上さんは自身の担当患者への治療があるため、Aさんに付き切りというわけにはいかなかったが、2人は同じリハビリテーション室で治療に当たっていたため、絶えず横目で彼女の様子を観察し続けた。すると、後上さんが「カルテを書こう」と声がけをした直後は実践するものの、声がけをしないでいると再び実践が止まってしまうという状態が、いつまでも続くのだった。

カルテの作成は、Aさんにとって負担の大きな作業であるために、声がけだけでは定着しないのだろう。そう判断した後上さんは、リクエストのハードルを下げることにした。「患者が理学療法を受ける期間の最初と最後だけ、『関節の曲がる角度』と『筋力』の2点に限って測定・記録する」という作業のみ、徹底することを求めたのだ。するとようやく、定着していったのだった。

患者の声を指導方法に反映

理学療法の専門性を持っていなかったBさんへの技術指導は、「治療手技」と「治療効果をチェックする方法」の両方につき、その基礎を教えることからのスタートだった。当初は2人で同じ患者の治療にあたり、技術を伝授。その後は、Bさんに単独で治療にあたってもらいながら、折々にアドバイスをするという形で指導していった。

この技術指導の効果をチェックする方法は、Bさんが治療とその効果のチェックを行った後に、後上さんが今一度効果のチェックを行い、Bさんの技量を評価するというものだ。例えば、Bさんが治療後に患部の関節が何度曲がるかを計測した後、後上さんも同じ計測をする。そうして、治療の効果が上がっているかどうか、および計測の仕方が正確かどうかの両方を確認する。これを繰り返すのはきわめて手間のかかる作業だったが、Bさんの学ぶ意欲が高かったことから、後上さんも粘り強く継続。やがてBさんは、難しい症例でなければ単独で治療に当たることができるようになっていった。

以上のほか、AさんやBさんに対する技術指導の効果をチェックする方法となったのは、「患者の声」だ。理学療法では、前述のように「治療に対する患者自身の満足度」も不可欠な要素。後上さんはAさんやBさんが担当する患者に対し、2人がいないタイミングを見計らって声がけをした。すると、中には「あの人の治療は強くてちょっと痛い」と吐露する患者もいれば、逆に2人の治療を「快適だ」とほめる患者もいた。後上さんはそうした声を、彼らの治療手技のどこに注目するか、あるいは彼らにどんなアドバイスをするかなど、指導の方法へと反映していったのだった。

POINT

第三者の声を拾う！

医療技術など、受け手がいるサービスの技術を同僚に指導する場合、そのサービスを実際に受けている人たちの声をうまく吸い上げれば、同僚の技量、ひいては隊員自身の指導方法の良し悪しを測る指標となる。

後上さん基礎情報

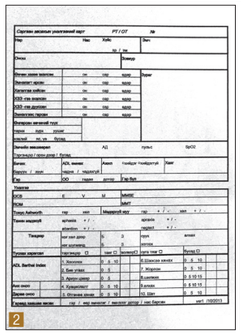
PROFILE

1988年生まれ、埼玉県出身。日本リハビリテーション専門学校を卒業した後、茨城県内の病院に理学療法士として5年間勤務。2016年7月、協力隊員としてモンゴルに赴任。18年7月に帰国した後、岩手県陸前高田市にある訪問リハビリステーションに理学療法士として勤務。

活動概要

ドルノド県保健局に配属され、理学療法に関する主に以下の活動に従事。

●患者への治療の実施
●同僚への技術伝達
●診療所や学校でのリハビリテーションに関する啓発の実施
●患者宅でのホームエクササイズの指導



1 他県で開かれた医療技術に関するセミナーで、Bさん（左）と共に理学療法の紹介を行う後上さん（右）
2 Aさんに活用を提案したモンゴル語版のリハビリテーション用カルテ
3 Bさん（右）に理学療法の治療手技をマンツーマンで伝授する後上さん
4 患者の家族に歩行介助の指導をするBさん（左）

意気投合した農業普及員に農家への稲作普及活動を任せたところ……

文＝照屋大地（てるやだいち）さん（ウガンダ・コミュニティ開発・2016年度次隊）

私は、ウガンダの農村で住民の収入向上のために稲作普及を進めるべく、県庁農業課に配属され、職員・農家らとともに活動を行っていた。配属先にとって私は初めての隊員だったが、近年ウガンダは国全体で収入向上のための稲作栽培に注力しているということもあり、とても協力的だった。しかし、常に協力的な配属先の姿勢に甘え、熟慮に欠いた活動をしていたのではと思うこともあった。

1年目は、現状把握と農家や職員との関係づくり、他隊員と自分の活動を比較してしまうこともあり、心に余裕がない状態だった。そんなとき、農村の事務所に配属されている農業普及員のカウンターパート（以下、CP）に出会う。彼は稲作の知識こそ浅かったが、周辺農家とのつながりが強く、年齢も私と近かったため良きパートナーとなった。2年目の活動は軌道に乗り、CPとともに稲作栽培技術指導やモデル農家の育成などを行い、それらは配属先や農家から高い評価を得られた。

当時、1年目の遅れを取り戻したいと必死だった私は、ひとつでも多くの成果を残せたらと日々活動していた。その中で、CPと同じ事務所に配属されている農業普及員のFと出会い、農家と密な関係を構築している彼と意気投合した。彼を信用し、新規農家獲得または既存農家への支援のために種子などを託した。

しかしある日、普及員Fが自身の利益のために稲作を始めていることが明らかになった。さらに、普及先農家のための肥料購入用資金も、自身の稲作に使用する肥料や農薬代に充てていたのであった。

その後、普及員Fと顔を合わせるたび、普及の在り方について話したが、彼が自身の利益のための稲作栽培を辞めることはなかった。普及員Fに時間を割くことよりも、農家への普及活動に時間を費やすべきだと考えた私は、それから普及員Fと共に活動をすることはなくなった。

私は、帰国後も普及活動が続くように考え、CPとともに最後まで活動をし、配属先からも称賛を得ることができた。しかし、私の中では「ひとりの普及員の考え方すら変えられなかった」「当時の自分は普及員Fの考えを深く聞き、理解しようとしなかったのでは？」と、今でも後悔として心に残っている。活動を通じてウガンダ、任地のことを知った気でいたが、それが慢心を生んでいたと感じている。C

稲の生育状況を見る照屋さん（左）と、農家（中央）、農業普及員のCP（右）

PROFILE

1990年生まれ、沖縄県出身。愛知学院大学文学部グローバル英語学科を卒業後、旅行会社の沖縄ツーリストに入社。退職後、読谷村役場にて臨時職員として勤務。2016年9月、協力隊に参加。18年9月、帰国。現在は読谷村役場にて臨時職員として勤務。

活動概要

ウガンダにおいて任地住民の稲作を通じた収入向上を目指し、以下の活動を行う。

- バイク巡回による、周辺住民への稲作栽培技術普及
- 県庁周辺住民を対象とした稲作栽培技術と衛生啓発のワークショップを開催
- モデル農家の育成、展示圃場を活用した新規・既存農家への稲作アプローチ

“失敗”から学ぶ #168

事例整理

【本事例の状況（SWOT分析）】

	促進要因	阻害要因
内部	【隊員の強み（S）】稲作栽培技術、種子や稲作にかかる資材の提供。	【隊員の弱み（W）】ひとつでも多くの成果を残したいという焦りがある。
外部	【環境の良い面（O）】換金作物としての稲作栽培に興味をもつ農家が多い。	【環境の悪い面（T）】貧困による普及員の活動に対する意識の低さ。

活動開始

農業普及員とともに、地域全体のコメの収量を増やそうと試みる。

活動範囲、農家数、収量を増やそうと焦るあまり（W）、活動全体の動きの把握に欠き、農業普及員の考え（T）に気づけない。

立てた目標

稲作を通じた住民の収入向上。

実際の結果

農業普及員が自身の利益のために活動資金を使用。

隊員自身の振り返り

失敗の原因は、他隊員との活動と比較して焦っていたこと、忙しさにかまけ普及員Fの種子配布など農家への稲作普及を任せきりにしていたこと、さらに問題発覚後もひとりで抱え込み、根本的な解決を図ろうとはしなかったことです。本来なら、比較して焦るのではなく、他隊員から活動のヒントを学び、自分のペースで活動すべきでした。また、普及員Fに種子を託すとき、最初は様子を見る必要があったこと、さらに問題が起きたとき配属先としっかり話し合い、解決策を探るべきでした。帰国した今、この経験を学びとし、これからはそれぞれの人間の目線に立って物事を考えられるように心がけ、日々頑張っていきたいと思っています。

他隊員の分析

事前の意思疎通と信頼関係の構築が鍵

普及員Fは、自分なりに稲作普及のあり方を模索していたのかもしれませんね。この場合、種子や資金を託す前に、普及について十分に意見交換をしておけば、違った関係を築けたかもしれません。あるいは、農民たちの前で、稲作普及事業の目的や、種子・資金の用途を説明した上で託せば普及員Fも従ってくれたかもしれません。私は、新規作物の栽培を託す農民は、時間をかけて選びました。普及員や農民もそれぞれ自分なりのやり方や想いを持っているので、時間をかけた意思疎通と信頼関係の構築が、成功の鍵になったのかと思います。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・コミュニティ開発・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

県の農業・灌漑・組合課に配属される。普及員とはペースが合わず、単独で農民と関係を築き、収益性の高い農産物の導入・栽培指導・販路開拓や、稲作（陸稲（おかぼ））試験栽培および、果樹生産プロジェクトを行った。

相手にとっての己を知る

「彼を知り己を知れば百戦殆（あや）うからず」という言葉がありますが、隊員にとって大事なことは相手のことを知るだけではなく、「相手が自分をどう見ているか」を判断することだと思います。私も任地・配属先にとって初めての隊員だったので、多くの人が興味を持って近づいてきました。しかしよくよく話を聞いてみると、自己利益を追求するだけの内容だったことが多々ありました。活動成功の鍵は間違いなくカウンターパートや活動のパートナーです。その相手を吟味することは、隊員活動に限らずあらゆる場面で必要とされる視点だと思います。

文＝協力隊経験者

- アフリカ・コミュニティ開発・2014年度派遣
- 取り組んだ活動

村落部でのネリカ米の栽培・普及活動、品種改良種キャッサバの栽培・普及活動、水衛生啓発活動、ハンドポンプ修理、水源整備、魚の養殖などを通じて、村落住民の生活環境の改善を目指し活動を行った。

派遣人数は少ないものの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

希少職種図鑑

#B101

水質検査

派遣中▶3人
累　　計▶91人
分　　類▶公共・公益事業
活動例▶水源地や浄水場での水質検査
及び水質データの統計分析など
類似職種▶上水道、水資源開発など

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2018年12月31日現在。

同僚に検査作業の改善点を指導する伏見さん。現地で活動し、「日本の水質検査の基準と常識は置いておき、任地のグレードに合わせるという勇気をもつことも大事だ」と感じたそうだ。「そういう事実を受け入れるのも異文化適応かもしれません」と伏見さんは話す

PROFILE

1983年生まれ、静岡県出身。2009年、島根大学生物資源科学部生態環境科学科卒業後、排水処理を中心に事業展開する株式会社エステムに入社。主に計量証明事業に従事しつつ、水質汚濁改善手法について学ぶ。16年11月に退職し、17年1月より協力隊に参加。19年1月、帰国。

活動概要

ケニアの地方水道局に派遣され、浄水場の水質管理とオペレーション改善のための指導を目的に、以下の活動を行う。
●水質検査の技術指導
●新規水質検査項目の立ち上げ
●水質検査の浄水場オペレーションへの反映
●給水エリア内水質調査　など

話

伏見秀明（ふしみ ひであき）さん
（ケニア・2016年度3次隊）

Q メインの活動は？

水質検査技術の定着と検査結果のオペレーションへの反映について主に取り組みました。配属先の浄水場は、私の赴任前にJICAの無償資金協力により建設されたもので、事業担当者が水質検査スタッフやオペレーションスタッフに技術指導していたため、同僚のスタッフは基本的な操作をある程度習得していました。しかし、正確さが要求される水質検査の技術が未熟だったり、浄水の工程で使われる薬品の使用量が適当なさじ加減で決められていたりなど、技術的に改善が必要な点がありました。スタッフはシフト制で勤務しており、関係するスタッフを一度に集めることが難しかったため、赴任時から任期満了時まで、出勤中のスタッフひとりひとりに手取り足取り指導していきました。

Q 活動の最大の困難は？

新規の水質検査項目を立ち上げようとした際に必要な機材（薬品など）が手元になかったことです。予算不足ではなく、調達先の手がかりがありませんでした。水質検査に必要な機材は専門的な物が多く、ほとんどの物は身近な物で代用できません。手元にある機材は無償資金援助で供与された日本製品で、試薬などはいつか使用期限が切れて精度の限界を迎えます。日本からの輸入を視野に入れつつ、多少グレードを下げてでも類似品をケニア国内で調達する必要がありました。

Q 試みた解決策は？

近所の高校を訪問する機会があり、そのとき実験室を見学できれば入手可能な薬品がわかると考えました。見学した結果、私が必要とする薬品がウエブサイトもないような小さな製造業者から購入できることが判明。さらにそこから他業者も紹介してもらえるなどつながりが増えていきました。大学の研究室など、浄水場とはあまり関係のないところにも実験室があり、そこでは実験器具や試薬が使われているという、後から考えれば当然だったことを当時は見落としていました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

水質検査員は入手できる機材が限られる上に、専門品や薬品の代替方法を考案することが非常に困難なので、そういう部分が活動範囲の枠となってしまいがちです。日本では水質検査は非常にシビアな技術が要求されますが、途上国では思い切って寛容になり、許容リスクレベルを上げてしまって良いかもしれません。水の安全性などを判断するために、限られた水質検査の結果をどのように活用できるのか。それを考え、工夫することがこの職種の醍醐味になるかと思います。 C

#G127

レスリング

派遣中▶3人
累　　計▶20人
分　　類▶人的資源
活動例▶競技の実践指導、競技の普及、
指導者の育成など
類似職種▶ー

※人数は、青年海外協力隊派遣実績、2018年12月31日現在。

魚住さんが計画・開催した「レスリング公式大会」の参加者たち。魚住さんは計画を実現させるために、「諦めずに続けること、違った価値観、考え方を受け入れること、次の世代に受け継がれる仕組みをつくること、周りの環境や人を味方につけること」を重点的に考えた

PROFILE

1993年生まれ、兵庫県出身。小学5年生からレスリングを始め、大学4年生までの12年間競技を続けた。主な実績としては日本選手権5位、大学選手権準優勝など。国外大会での入賞実績もあり。2016年3月、専修大学経済学部経済学科を卒業。大学のレスリング部監督の薦めで、17年1月、協力隊に参加。19年1月に帰国。

活動概要

国立国民スポーツ教育大学に配属され、レスリング競技において高い競技レベルの選手を輩出することを目的に、以下の活動を行う。
●配属先でレスリング授業の実施計画策定及び授業の実践技術指導のサポート
●地域の少年少女レスリング教室の活動にかかる計画の策定から実施までのサポート　など

話

魚住彰吾（うおずみしょうご）さん
（セネガル・2016年度3次隊）

Q メインの活動は？

セネガルでは、「セネガル相撲」というレスリングに似た競技が広く普及しているものの、レスリングの競技者は、成人100人程度で、少年少女は、ほぼ皆無。そこで、若年層への普及活動をメインとして地域の少年少女向けのレスリング教室の実施や、その参加者を対象にした、「レスリング公式大会」を開催しました。

公式大会は、派遣8カ月後に計画し、開催までさらに9カ月かかりました。開催効果を拡大するため、異なるスポーツ行政機関に協力を依頼。開催後は、各機関の間に協力体制ができ、今後、セネガル主導での大会運営・進行の体制が可能になりました。また、セネガル相撲協会関係者が、少年少女の選手に対し、国際大会出場に必須のライセンス取得への協力を表明してくれました。

Q 活動の最大の困難は？

公式大会の開催です。配属先以外の地域のスポーツ行政機関やセネガル相撲協会と協力体制を構築し、開催しようと試みました。しかし、国・州・県の異なる行政機関内での立場上のトラブル（主導権、運営方法・体制に対する考え方の違い）により開催が困難となり、大会開催が2度破棄されました。その後、3つの行政機関の関係が悪化し、任期内での大会実施が難しくなったことがありました。

Q 試みた解決策は？

私自身が各行政機関の仲介役となり、関係の修復を図りました。具体的には、各行政機関の長と直接話し合う機会を20回程つくり、レスリング普及の意義や可能性、普及に取り組む上での大会開催の重要性について議論しました。また、各行政機関の長が、公式な会議で議論し合う場を設け、彼らと解決策について話し合いました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

2年という期間は長いようで短いです。こう感じていた私は四六時中、活動のことを考え、行動に移しました。その中で失敗や挫折は何度も経験しましたが、そのたびに問題点を見つけ、解決策を考え、突破口を見つけました。この原動力となったのはレスリング関係者の存在です。彼らのためにレスリングを通じて可能性を広げたいということが、私に強い意志や力をくれました。

現在活動されている方も誰かひとりでも考えを共有できる仲間がいれば、「その人のために」という考え方で突き進むことで、強い意志や力を得られると思います。それが、自分ひとりでは見出せなかった道につながると思います。

皆さんも、全力でぶつかり、悩んで、考えて、楽しんでください。皆さんの活動がひとりでも多くの人の心を動かす力になることを祈っています。 C

Vol.164

before
衣料品店 店長

↓

after
厚生労働省 検疫官

茨城空港で検疫業務をする髙橋さん。国内に入ってくる人に対しての検疫のほか、海外渡航者に対して注意喚起を行うことも、検疫官の重要な仕事のひとつ。「特にアフリカへの渡航者に対し、滞在期間中の注意点などについて伝える際には、実態と経験に基づいた助言ができるため、協力隊経験が生かされていると感じる」と髙橋さんはいう

小さなきっかけをつかみ取れ

ウガンダ・感染症対策・2010年度2次隊

髙橋永知（たかはしえいち）さん

人生を変えるきっかけは見落としてしまうほど小さなものだ。衣料品店の店長だった髙橋永知さんは、帰国したばかりの協力隊員を接客したことがきっかけで、協力隊になろうと決意する。看護学校に通い、看護師になり、協力隊に参加。現地で知識不足を感じ、帰国後、進学した大学院で、検疫官の仕事を知り、現在は厚生労働省の職員として働いている。

7年越しの夢、協力隊参加

「明確な目標がなかった」、協力隊参加を決めるまでの自身について、髙橋さんはそう話す。勉強はどちらかといえば嫌いで、高校卒業後、医療関係の仕事をする父親の勧めで入学した医療系専門学校は中退。親に勘当された。

バイトで生計を立て、そのとき働いていた衣料品店の住所が自分の誕生日と同じだからという理由で正社員になる。週1回休みがあるかどうかというハードな仕事だが、接客は好きだった。店舗は上野。土地柄、外国人が多い。接客した外国人と友人になったことで、髙橋さんに語学の習得という目標ができる。新しい言葉を知り、その言葉で知る新しい世界。テレビの英語講座で勉強し、外国人の接客をすべて担当し、休日は観光地に来た外国人に話しかけ、無料でガイドをした。外国人のバイヤーともやりとりができるようになり、店の売上もアップ、店長に昇進する。

ある冬の日、店に半袖の客が来た。「服がなくて」と話す客は、帰国直後の協力隊員だという。「興味がある」と伝えると、「英語を勉強したいという理由ならやめたほうがいいけど、医療・教育・農業の技術と知識は現地に役立つ」と聞かされた。その言葉に触発され、髙橋さんは、協力隊になるために看護師の道を選び、そこからは一心不乱に勉強した。親に土下座して実家に戻り、バイトをしながら地元の看護学校に通った。卒業後、病院に勤務。その後、協力隊を受験して、合格。協力隊参加を決意してから7年が経っていた。

「病院の中より地域で活動をしたい」という思いがあった髙橋さんは、地域で啓発活動などをする感染症対策の職種でウガンダに派遣された。主に実施したのはＨＩＶ啓発活動と医療環境整備（５Ｓ普及活動）だ。特に印象に残る活動は、歌手を夢見るＨＩＶ感染者のバーバラとともに彼女の歌をレコーディングしたＣＤと、彼女のドキュメンタリーを主体としたＨＩＶに関する映像教材（ＤＶＤ）を作成したこと。当時、髙橋さんはＨＩＶ啓発ソングをつくろうと奮闘していたが、著作権の問題で頓挫しそうだった。そんなとき、感染症関連の会議で知り合いになったバーバラもＨＩＶ啓発ソングをつくろうとしていることを偶然知り、２人はともに活動することになったのだ。ＣＤとＤＶＤは、ウガンダの教育機関や日本の国際フェスティバルなどで販売し、売上げをＨＩＶ啓発を行う女性グループの活動資金などに充てることができた。

ウガンダの孤児院と日本の看護学校を映像通話で結び、HIVに関するディスカッションを行ったときの様子

髙橋さんが帰国したのち、ＨＩＶ啓発の歌がウガンダを訪れた欧州のＮＧＯスタッフの耳に入る。それがきっかけでバーバラはオランダに招待され、７００人を超える観客の前で、ＨＩＶ啓発の歌を披露する機会を得た。

「個々の隊員には、国を変えるほどの大きな力はないかもしれません。しかし、地道な活動から生まれる『小さなきっかけ』は、やがて大きな結果につながることを実感しました」

感染症から日本を守る

派遣中、映像教材を作成する際、公衆衛生に関する知識不足を痛感した。任期満了後も、海外で感染症対策に携わる職に就きたいと思っていた髙橋さんは、その弱点を克服するため、大学院に進学。同期生に検疫所の社会人大学院生がいたことで、海外で働くこと以外にも感染症対策の仕事をする機会があることを初めて知った。海外から日本に流入する感染症を防ぐという仕事内容を知り、故郷である日本を守る意義と使命感に惹かれ、検疫官になることを決意。修了直前に受験し、合格した。

現在は、検疫官として厚生労働省東京検疫所茨城空港出張所に勤務し、茨城空港で海外から入国する航空機や船舶に対し、検疫法に基づいて水際対策を行っている。協力隊で学んだ「小さなきっかけが大きな結果につながる」という教訓は、今の仕事にも通じている。「体調を崩して帰国した人たちの共通点を探るなど、些細な疑問から情報を収集し、未然に対策を講じることで、効果的な予防対策につながることもあります」と髙橋さんは話す。

ビザの緩和やローコストキャリア（ＬＣＣ）の就航拡大、また2年後の東京五輪を控え、今後国内に海外感染症が流入するリスクが高まる可能性も考えられる。

「海外感染症のトレンドや渡航動態の変化をいち早く察知し、適切に対応することで感染症から日本を守るという現在の仕事に、大きな使命感とやりがいを感じています。小さな行動であっても自分ができることを積極的に発信・行動することで、検疫所が行う感染症対策の一助になればと考えています」 C

髙橋さんのプロフィール

1979 **静岡県出身。**

1998 4月、埼玉県の医療技術専門学校に入学。その後、中退。

2002 東京・上野の服飾関係の会社に就職。

2005 4月、御殿場看護学校に入学。08年に卒業。

2008 4月、静岡県の病院で看護師として勤務。

2010 **9月、青年海外協力隊に参加①** 感染症対策隊員としてウガンダ・ブシア県庁保健課に配属。ＨＩＶ啓発活動と医療環境整備（５Ｓ普及活動）をメインに活動を行った。

2013 **1月、帰国。** 4月、帝京大学大学院公衆衛生学研究科に入学。翌年修了。

2014 4月、厚生労働省に入省。関西空港検疫所に配属となり、関西国際空港における検疫業務に従事。

2017 4月、厚生労働省東京検疫所、茨城空港出張所に異動となり、茨城空港における航空機に対する検疫業務、および鹿島・日立・常陸那珂港における外航船舶に対する検疫業務に従事。

選択の理由

英語を話すことが楽しく、外資系企業への転職も考えたが、「中退している自分には難しいだろう」と諦めていた。そんなとき帰国直後の協力隊員の話を聞き、参加を決意した。

↓

協力隊参加を決意

協力隊に参加

選択の理由

JPOやJICAの職員を目指そうと思っていたときに、大学院で検疫官に出会う。海外での活動は主に対象国の感染症対策というくくりだが、全世界から日本にやってくる感染症を防ぐ仕事があるということを知り、より広い視野で感染症対策に携わりたいと、検疫官に。

検疫官に

帰国後の理想と現実を語り合う

OB・OG 匿名座談会

第③回 ソーシャルワーカー篇

［座談会参加者］

A さん（女性）

【派遣前】
県庁職員
【協力隊】
▶現職参加
▶ソーシャルワーカー・アジア・2014年度派遣
▶市役所に配属され、ストリートチルドレン支援に従事
【帰国後】
県庁職員

B さん（女性）

【派遣前】
病院職員（社会福祉士）
【協力隊】
▶退職参加
▶ソーシャルワーカー・中南米・2014年度派遣
▶県庁所管の機関に配属され、1次医療機関（＊）でのソーシャルワークに従事
【帰国後】
公益社団法人職員

C さん（女性）

【派遣前】
福祉施設職員
（精神保健福祉士）
【協力隊】
▶退職参加
▶ソーシャルワーカー・アジア・2014年度派遣
▶精神保健福祉センターに配属され、精神障害者の再就職支援に従事
【帰国後】
県庁職員

＊1次医療機関…外来診療によって日常的な医療を提供する医療機関。

帰国後の道のり

A 私は県庁職員として児童養護施設[*1]の子どもたちの生活支援に携わった後、協力隊に現職参加しました。帰国後も1年間は派遣前と同じ仕事でしたが、次に児童相談所[*2]の一時保護所で1年間、子どもたちの生活支援に携わり、現在は児童相談所の児童福祉司[*3]として、児童の虐待や非行、障害などに関する相談に応じる仕事をしています。

B 私の派遣前の職は病院の社会福祉士[*4]で、お金や仕事など患者さんが抱える社会的な問題の解決を支援する仕事に携わっていました。協力隊は退職しての参加です。任期終了の半年ほど前から帰国後の進路に関する情報収集を始めたのですが、当時は「外国語を学び、国際協力にも携わったのだから、その経験を生かしたい」という気持が強く、帰国してすぐに保健・医療系の開発コンサルティング会社に応募し、就職しました。しかし、やはり社会福祉士とは業務内容が違いますし、海外を経験したことで「少子高齢化」や「社会的孤立」など日本社会が抱える課題の深刻化にも目が向くようになりました。そうして1年ほどで転職し、現在は地域住民が世代や障害の有無にかかわらず生涯活躍できる「ごちゃまぜ」のまちづくり事業に携わっています。具体的には、中山間地域に地方創生事業の一環として開設された就労継続支援A型[*5]の事業所で、社会福祉士として働いています。買い物や食事の準備が難しい高齢者のために、障害のある方々と弁当をつくって配達する事業所です。そのほか、住民が集える「地域の拠点」づくりにも取り組んでいます。

C 私も退職して協力隊に参加していますが、派遣前は精神障害者の支援を行う民間企業に精神保健福祉士[*6]として所属し、宿泊型自立訓練を行う施設や就労継続支援B型[*7]の事業所で支援員をしていました。帰国後は半年ほど地方公務員試験の勉強をし、県庁に合格できたので、昨年の4月から県庁の社会福祉士として精神障害者を支援する仕事を担当しています。帰国するころは大学院への進学を考えていたのですが、「まずは年齢制限が厳しい道から試してみよう」と選んだのが今の職です。

協力隊経験の生かし方

C 私は公務員試験に受かってから入職するまでの半年間、言わば「リハビリ」の目的で1日5時間ほど、放課後等デイサービス[*9]の支援員のアルバイトをしました。途上国ののんびりとした空気の中で2年間を過ごし、さらに半年間、勉強だけをしていたので、いきなりフルタイムの仕事をこなすのは難しいだろうと思ったからです。日本社会に少しずつ慣れていくやり方としては良かったなと感じています。

A 私は現職参加ですので、帰国してすぐにフルタイムで働き始めたのですが、仕事の忙しさに慣れることはさほど苦ではありませんでした。むしろ重荷だったのは、協力隊の経験を職場にどう還元するかという点です。県庁もぎりぎりの人員で回している時代ですから、協力隊に現職参加した私は「向こうで何をしてきたの？　その経験を仕事にどう生かせるの？」という目で見られるわけです。ところが、協力隊時代の活動は市役所と地域のNGOをつなぐことだったのに対し、帰国して就いたのは子どもを直接支援する業務であり、重なる部分がありませんでした。そのため、協力隊の経験を仕事の中で生かす方法が見つからず、葛藤を抱えながら働いていました。ようやく昨年、協力隊時代の活動に似た業務の担当となったので、これから協力隊経験を生かしていけるだろうと考えているところです。

C 私が現在携わっているのは、協力隊時代の活動と同じ「精神障害者の支援」ですが、それでも協力隊経験が今の仕事に生きているかと言われると、そういう実感はほとんどありません。協力隊活動は、「こんなことをしてみませんか」と自分から提案し、実行していくという要素が大きく、その点で日本の役所での仕事とは異質だからなのかなとも思います。

B 私は派遣前に病院で働いていたときは、患者さんへの個別の支援がメインで、地域に出て仕事をする機会も少なく、「地域」を意識することがほとんどありませんでした。一方、協力隊時代の活動は住民から児童虐待やDVなどに関する相談を受けることだったのですが、地域によって家庭内暴力の件数に差があったりするため、おのずと「地域」を意識するようになりました。現在の仕事は障害のある方が地域社会で活躍できるようサポートすることですので、私は協力隊経験がステップになっていると感じています。

A たしかに私も、協力隊経験によって「地域」というものをより意識するようになった気がします。日本は児童福祉の制度や施設が充実していますが、派遣国は日本ほど財政の余裕がないため、NGOなど地域の資源を活用しなければ問題を抱えた子どもを支援しきれません。そういう児童福祉のあり方を知ったことで、実は日本でも、問題を抱えた子どもを地域とつなげ、地域の中に彼らの居場所をつくることが大切なはずだと思うようになりました。そのため、私は今の仕事のなかで、地域の方々に児童相談所の役割についてお話しする機会をなるべく多く持つよう努めています。

C 私の派遣国も、精神疾患があるだろうという方も社会から排除されず、何となく地域で生活できていましたし、日本と比べると何となく社会に居場所があると感じました。

A お話ししたように、「専門性」という面では、協力隊経験を仕事で生かしていくのはこれからという状態ですが、「働き方」という面では、知らず知らずのうちに協力隊経験を生かせている部分があると、最近は感じるようになっています。例えば、私は帰国してから1年ごとに担当業務が変わってきているのですが、状況のそうした変化に戸惑わずに対応できているのは、カウンターパートの交替などめまぐるしく変わる状況に対応してきた協力隊時代の経験があるからだと思います。

B その点は私も同様です。現在の立場は「社会福祉士」ですが、携わっているのは地方創生事業の一環としての障害者支援ですので、地域の方々と地域の今後について話をすることもありますし、経理の仕事なども任されています。「何でも屋」の状態なわけですが、そうした中でさまざまな業務に柔軟に当たることができているのは、協力隊時代に同じような経験をしているからだと思います。

今後のビジョン

C 実は、私はいずれ起業し、その立場で精神障害がある方を支援していきたいと考えています。先ほど少しお話ししたとおり、協力隊時代は課題解決に向けた対策を自分で企画し、提案し、実行するという活動だったわけですが、私はそうした活動にとても大きなやりがいを感じました。一方、地方自治体での仕事は法令に基づいて行うものですから、やはりできることに限りがある。そういう仕事は私にはちょっと向いていないかなと、今の職に就いて実感しています。起業は自由が利く分、責任も重くなりますが、私にはそちらのほうが向いていると思うわけです。

A 私は反対に、地方公務員としての仕事にもっと打ち込んでいきたいと考えています。というのも、私は協力隊時代、それまでの経験が足りず、あまり現地の役に立てなかったという思いが残ったからです。もっと児童福祉行政の専門性を深めていき、いずれまた、協力隊とは違う形で派遣国の児童福祉行政を支援することができればいいなと思っています。

B 私もAさんと同様、今の地域創生の仕事で経験を積んだうえで、それをいつか途上国支援につなげたいという希望を持っています。日本の「地域」が現在直面している少子高齢化などの課題は、いずれ途上国も直面する時代が来るわけで、そのときに日本が蓄えた経験と技術が大いに役立つはずだからです。 C

＊1 児童養護施設…保護者がいない児童や虐待されていた児童の受け入れ・養護などを行う施設。
＊2 児童相談所の一時保護所…虐待の通告を受けた児童などを一時的に保護する施設。
＊3 児童福祉司…児童相談所で児童の虐待や非行、障害などに関する相談に応じる職員。
＊4 社会福祉士…ハンディキャップのある人から相談を受けたり、その生活支援をしたりする専門職の国家資格。
＊5 就労継続支援A型…一定の支援のもと、障害者が雇用契約を結んだうえで働ける制度。
＊6 精神保健福祉士…精神障害者から相談を受けたり、その生活支援をしたりする専門職の国家資格。
＊7 宿泊型自立訓練…精神障害者に居住の場を提供して行う、生活能力などの訓練。
＊8 就労継続支援B型…一定の支援のもと、雇用契約を結ぶのは困難な障害者が、就労訓練を受けられる制度。
＊9 放課後等デイサービス…障害児を対象に放課後や休日、療育・居場所の提供を行うサービス。

JICA海外協力隊的プチテクガイド

簡単＆便利！ 活動・生活のパワーアップに役立つ

第93回

投稿募集！

活動や生活に役立つちょっとしたテクニックをお持ちの方は、『クロスロード』編集室まで。
crossroads@sojocv.or.jp

知っトク情報

写真を楽しむ③

ナビゲーター＝森 佑一さん
（ヨルダン・環境教育・2014年度3次隊、フォトジャーナリスト）

「もの」の撮影で覚えておきたい3つのポイント

現地で生活や活動する中で、活動の成果物や珍しいお土産など、さまざまな「もの」を撮影する機会も多くなると思います。普段何気なく撮ってしまう「もの」も、撮り方ひとつで魅力がより伝わります。今回そのコツをお伝えできればと思います。

①レンズの画角に気をつけよう

以前、人物撮影の回でも紹介しましたが、レンズには「圧縮効果」というものがあります。ズームせずに撮影すると近くのものが大きく、遠くのものが小さく写ります。逆にズームすると手前のものと奥のものが近づいた様に写ります。

そのため、ズームしないで「もの」を近くで撮ると形が歪んで写ってしまいます。程よくズームして自然に写る画角で撮影するようにしましょう。

②「もの」の配置や背景に気を配ろう

主役となる「もの」（被写体）の背景にある物や色にも気をつけましょう。背景にごちゃごちゃとたくさん他の物があったり、背景色が被写体と同系色だったりすると被写体が目立たなくなってしまいます。そのため、背景をアレンジできるときは、不要な物を取りはらったり、被写体が際立つ色の紙を敷いたりしてみましょう。それだけでも印象がガラリと変わりますよ。

③レフ板を使ってみよう

「もの」を撮影する上での+αの工夫としてレフ板の使用がおすすめです。レフ板とは光を反射させるための板のことで、白い紙をダンボールに貼り付けるだけで簡単に安くつくれます。

撮影の際に被写体への光の当り具合で陰ができます。その部分にレフ板で光を反射させ陰を和らげましょう。それだけで全体的に明るくなり、陰になっていた模様やデザインなどをちゃんと写し出すことができます。

ちなみに自宅で撮影する場合は、レースのカーテンを引いた窓際だと程よい光が得られるのでおすすめです。「もの」を撮るというのは簡単な様で実はとても奥が深いものです。人や活動の写真と違って、じっくり心ゆくまで撮影を行えるので、自分なりにいろいろ工夫してみてくださいね。任地での写真ライフに役立てば幸いです。

生活に役立つ技

あるもので日本の味②

ナビゲーター＝小栗美香子さん
（ザンビア・コミュニティ開発・2017年度1次隊）

ソヤピース（乾燥大豆肉）の担々麺

停電が続いて肉が買えない、洗い物の水を節約したい方向けのレシピです。ソヤピースとは大豆からつくられた肉の代用品で、今回はミンチ状になっているものを、豚ひき肉の代用品として使います。ザンビアでは無糖のピーナツバターが日本より簡単に手に入るので、ゴマペーストの代わりに使用しました。できるだけ無糖のピーナツバターがおすすめです。そのほか、カシューナッツのペーストなどでもつくれますよ。

③ピリピリ、ピーナツバター、コショウ、レモン汁を入れ、味をみて塩を入れる。ピリピリは唐辛子の加工品。メーカーによって辛さが異なるので加減して入れ、ないときは刻んだ鷹の爪などでもOK。

［材料］（1人前）
- ●水…400ml
- ●チキンスープの素…1/2個
- ●玉ネギ（みじん切り）…50g
- ●トマト（みじん切り）…50g
- ●ニンニク（みじん切り）…小さじ2
- ●ソヤピース…10g
- ●パスタ…100g
- ●ピリピリ（唐辛子）…小さじ1/2
- ●ピーナツバター…大さじ2
- ●コショウ・塩…少々
- ●レモン汁（あれば）…大さじ1

④担々麺の出来上がり。

①鍋に水、キチンスープの素、みじん切りにした玉ネギ・トマト・ニンニク、ソヤピースを入れて煮立てる。

⑤ピーナツバター大さじ1、砂糖大さじ1、塩（あれば醤油）小さじ1を混ぜて、茹でた青菜を和えると、胡麻和えのような味になる。

②パスタを入れ、柔らかくなるまで煮る。

活動に役立つアイデア

アイスブレイクの手法①

ナビゲーター＝菊地格夫さん（コスタリカ・気象学・1999年度3次隊）
元JICA専門家（参加型保護区管理）、NGO RASICA代表

アイスブレイク（IB）とは？

隊員の皆さんは、自身の活動においてワークショップ（WS）を行うことがあると思います。最近は、参加型の体験学習スタイルが主流で、WSを進行するファシリテーター（FT）が重要な役割を担っています。

アイスブレイク（IB）とは名の通り、参加者の緊張を氷に例え、それを溶かす、壊すといった意味があります。初対面同士の参加者の不安や緊張を和らげ、発言や対話をしやすい雰囲気をつくりあげることを目的とし、通常はWSの開始時に行います。

WSにおけるFTの基本ルールは、IBの進行に非常に重要で、「否定しない」「コメントは常に前向き」「なるべく全員にかかわる」などがあります。対象人数やスタイル、開催時間によってIBの構成を柔軟に変え、また男女が偏らないように考慮することも重要です。今回は基本的なIBをいくつか紹介しましょう。

①四文字熟語自己紹介

漢字を使うため、海外でのアレンジは少し難しいのですが、これぞIBというものです。このIBの優れている点は、笑いや納得で帰着し、心理テストに近いため科学的な根拠がなく、その笑いが人を傷つけない点です。初対面の人の内面をのぞかせてもらったような気分になるため、その後のWSでのグループ活動がスムーズになりやすいのです。

四文字熟語自己紹介
- ●所用時間：5〜10分
- ●人数：3人以上（3〜6人のグループで）

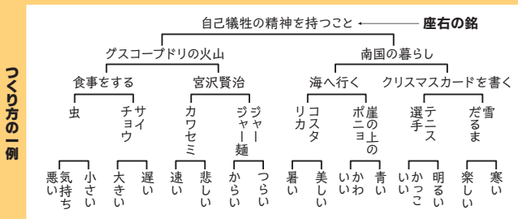
❶参加者それぞれに紙とペンを持たせます。
❷四文字熟語を思いついた順に3つ紙に書くよう、指示します。注意点は、思っても口に出さないこと。他の参加者がその単語につられてしまうのを防ぐためです。
❸全員が書き終わったのを確認した後に「最初に書いたものが、人生観、2番目のものが恋愛観、最後に書いたものが死生観、と言われています」と説明を行います。
❹グループ内で書いたものを共有し合います。大抵の場合は笑いの渦に包まれます。
❺その後、FTが笑いの大きかったもの、印象的だったものを紹介します。

② 座右の銘のつくり方

このIBは、深層心理が浮き上がることがあり、①のIBと同様に、初対面の人の内面をのぞかせてもらったような気分になるため、その後のWSでのグループ活動がスムーズになりやすいです。

座右の銘のつくり方
- ●所用時間：約15分
- ●人数：3人以上（3〜6人のグループで）

❶参加者それぞれに紙とペンを持たせます。
❷思いついた形容詞を16個書き出すよう指示します。横書き文字の場合は縦に16個、日本語の縦書きの場合は横に16個、並べて書き出すように指示します。最初に書き出した16個が、トーナメント表の1回戦にあたります。
❸隣り合わせの単語を組み合わせた時に思い浮かぶ言葉、短い文章を、その右側（上側）に書き出します。2回戦には8個出てきます。2回戦からは、名詞や動詞、文章など思い浮かぶものを書かせます。
❹それを決勝まで行うと、最後のアウトプットが出ます。大抵の場合、名詞や動詞、短い文章になります。「最後の短い文章が書いた方の座右の銘と言われています」と紹介します。
❺グループで共有後、FTが印象的と感じたものをいくつか紹介します。



③部屋の四隅

このIBは、参加者同士が、あらかじめ分けた4つのカテゴリーにどれくらい所属する人がいるのかをお互いに目で見て知ることで、WSを始める前の緊張感を和らげることができます。

部屋の四隅
- ●所用時間：約15分
- ●人数：10人以上
- ●場所：四角い教室（広場でも可能）

❶参加者に、部屋の四隅をひとつずつ指さし、そこが質問の回答場所であることを説明します。「はい」「いいえ」「まぁまぁ」「わからない」などの4種類が一般的です。
❷質問を参加者に投げかけます。例として、災害対策の研修ならば「雨期は好きですか?」、栄養改善の研修ならば「お米を食べますか?」など。質問によって、四隅の回答は柔軟に変えます。必ず、わからない、など意思を表明しなくてもいい場所を残しておきます。
❸質問を参加者に投げかけ、参加者が思っている場所への移動を促します。
❹FTはそれぞれの四隅にいる参加者数人に、なぜその回答なのかを質問して、全員と共有します。

【その他の質問の例】A）参加者の出身地を質問とし、「村内」「村外だけど市内」「市外だけど県内」「それより遠く」などに分ける。B）参加者の状態を質問とし、「既婚」「彼氏彼女あり」「なし」「秘密」で分ける。

【ポイント】参加者自身にそれぞれ四隅を見てもらうように呼びかけ、質問に対する参加者の比率を、目で見て大体の割合を感じ取れるようにします。質問を工夫し、参加者はどこから来た人がメインなのか、どんな人なのか、年齢や既婚かどうかなど、WSのテーマに沿った内容を知ってもらうことで安心感を持たせます。

2018年度秋募集の選考が終了

2018年度秋募集の二次選考が終了し、2月15日に合否が発表されました。それぞれの部門別の合格者数は以下の通りです。

青年海外協力隊（JV）／
日系社会青年海外協力隊（日系 JV）〈部門別〉

部門名	要請数（件）		応募者数（人）※1	合格者数（人）	
	JV	日系 JV		JV	日系 JV
計画・行政	127	1	203	71	1
公共・公益事業	32	—	7	3	—
農林水産	77	1	45	27	—
鉱工業	52	—	13	4	—
エネルギー	2	—	0	—	—
商業・観光	37	—	48	22	—
人的資源	654	50	467	199	14
保健・医療	199	2	148	78	0
社会福祉	58	5	27	13	1
合　計	1238	59	958	417	16

※1 JVと日系JVは併願が可能なため延べ人数。

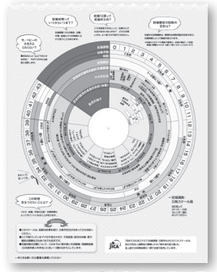
シニア海外協力隊（SV）／
日系社会シニア海外協力隊、日系海外協力隊（日系 SV）※2 ／
海外協力隊（海外）〈部門別〉※3

部門名	要請数（件）			応募者数（人）※4	合格者数（人）		
	SV	日系 SV	海外		SV	日系 SV	海外
計画・行政	5	—	6	79	2	—	2
公共・公益事業	7	—	8	29	2	—	3
農林水産	14	1	6	26	3	0	0
鉱工業	15	—	4	46	8	—	0
エネルギー	3	—	—	9	2	—	—
商業・観光	13	—	6	115	8	—	2
人的資源	22	10	24	237	12	7	13
保健・医療	9	2	6	49	5	2	1
社会福祉	3	5	—	65	1	4	—
合　計	91	18	60	655	43	13	21

※2 40～45歳の日系青年海外協力隊も含まれます。
※3 40～45歳の青年海外協力隊も含まれます。
※4 SVと日系SVは併願が可能なため延べ人数。

隊員の活動がきっかけとなり「ベネッセ」の雑誌にJICAのロゴが掲載

株式会社ベネッセコーポレーションが発行する『初めてのたまごクラブ2019年冬号』（18年12月15日発行）の、とじ込み付録「妊娠週数・日数 早わかりカウントスケール」にJICAのロゴが掲載され、隊員によって派遣国で使用されていることが紹介されました。妊娠経過などがひと目でわかる同スケールは、2011年度にネパールへ派遣された保健隊員を皮切りに、隊員によって派遣国の言語に翻訳され、現地の妊婦指導に活用されてきました。ベネッセとJICAは、2016年9月1日に同スケールの利用に係る覚書を締結し、ベネッセは、「少しでも開発途上国の母子の健康向上に役立つのであれば」と、隊員による派遣国での同スケールの利用を許諾しています。同スケールの使用は、青年海外協力隊事務局にお問い合わせください。



とじ込み付録の「妊娠週数・日数 早わかりカウントスケール」。右下にJICAのロゴが掲載されている

2019年度春募集応募受付中

2019年度春募集の応募を4月3日まで受付中です。技能や経験に応じて、一般案件またはシニア案件への応募が可能です。詳しくは、JICA海外協力隊ウェブサイト「募集情報」をご覧ください。

https://www.jica.go.jp/volunteer/application/

JICA海外協力隊（短期派遣）募集

2018年度第4回目の募集は、3月4日～25日です。詳しくは以下JICA海外協力隊ウェブサイトをご覧ください。

https://www.jica.go.jp/volunteer/application/short-seinen/
https://www.jica.go.jp/volunteer/application/short-senior/

JICA海外協力隊への外務大臣感謝状授与式を開催

1月11日、帰国したJICA海外協力隊への外務大臣感謝状授与式が、東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルにおいて開催されました。授与式には、帰国した青年海外協力隊員とシニア海外ボランティア、60人が出席し、鈴木憲和（すずきのりかず）外務大臣政務官から感謝状を授与されました。来賓として「日本の国際協力　特に青年海外協力隊の活動　を支援する国会議員の会」（JICA議連）に所属する松下新平（まつしたしんぺい）参議院議員のほか、白眞勲（はくしんくん）参議院議員、井上一徳（いのうえかずのり）衆議院議員、また現職参加の帰国隊員の所属先代表者も参加されました。

授与式では、鈴木外務大臣政務官に労いと「隊員は日本のODAの最前線で活動されており、日本と開発途上国との友好関係の強化に重要な役割を担っている」との言葉をいただきました。次いで、隊員代表として、田中洋介（たなかようすけ）さん（パラグアイ・水泳・2016年度3次隊）があいさつし、「日本式を押し付けるのではなく、現地の人と話し合いながら、日本とパラグアイの融合を目指し、活動してきた」と報告しました。

授与式に続いて行われた懇親会では、小原遼大（おはらりょうた）さん（ウガンダ・理科教育・2016年度3次隊）、古川祐子（ふるかわゆうこ）さん（ソロモン・環境教育・2016年度3次隊）が、活動を報告しました。

鈴木外務大臣政務官に感謝状を授与される田中さん（右）

お詫びと訂正

11月号22ページの「“失敗”から学ぶ」の記事中に、『ドイツのNGO「SOS子どもの村」』とあるのは、『オーストリアのNGO「SOS子どもの村」』の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

安全対策コラム

犯罪や事件に巻き込まれないよう
安全対策を日々心がけましょう

防犯対策

犯罪のターゲットとならないように

スリや窃盗、空巣その他犯罪被害は、事前に犯罪者にターゲットとして狙われていることが多くの例でみられます。犯罪被害を未然に防ぐためには、犯罪者から狙われる対象としてターゲットにされないことです。ターゲットにされないための心構えとして対策例を以下に記します。

対策

【海外安全対策の三原則】「目立たない」「行動を予知されない」「用心を怠らない」を常に忘れない。

1. 目立たない

●行動、言動、服装、所持品など、現地の人の目線で考えて行動する。また、女性の場合は、肌の露出をなるべく避ける。

2. 行動を予知されない

●行動パターン（時間、場所、ルート）を変えるなどを意識的に行う。

●旅行、出張等で自宅を不在にする際には、留守であることを他人に知られないように留意する。明らかに留守や一定期間不在であることが知られると空巣のターゲットになります。

3. 用心を怠らない

●何らかの隙や油断がないか犯罪者は予め観察しターゲットを狙っています。誰かが自分の様子を不自然に見ていたり、不審な動きに気が付いたりしたらその場を速やかに立ち去るなど用心を怠らない。

●危険な時間帯、危険な場所には立ち入らない。市場やイベント会場など大勢の人が行き交う場所は、スリや引ったくりに気を付ける。買い物に夢中にならない。バッグの斜め掛けは引ったくり被害の際に体が引きずられ怪我を負う危険があるので避ける。

●バスに乗車する際は、バス停で待っている時、バス乗降時、乗車中のスリ等の被害に注意する。車内では居眠りしない。

●大金、貴重品を持ち歩かない。財布やスマホなどを人前でむやみに出し入れしない。

●手提げバッグやリュックのチャックが半開きだったり、ポケットに財布などが入っていることが明らかにわかったりするなどの隙をみせない。

健康管理員より　健康管理コラム

心身共に健康に2年間を過ごすために

脱水予防を！

この時期、皆さんの派遣国では夏の暑い国と冬の寒い国、両方の気候があり、どちらの場合も脱水に陥るリスクがあります。夏は発汗も多く、ミネラルを失いやすくなるため、脱水を起こしやすくなります。そして、冬でも脱水を引き起こすことがあります。空気の乾燥が続き、暖房器具の使用により湿度が下がるなど乾燥した環境では、皮膚や粘膜あるいは呼気から、特に自覚がないまま水分が失われる「不感蒸泄（ふかんじょうせつ）」が増えるためです。冬は日常的に生活する中で、知らず知らずのうちに体から水分が失われる量が増えていることになります。夏の暑い時期だけでなく、冬にも脱水を予防することが大切です。

脱水を防ぐ水分補給では喉が渇く前からのこまめな水分、塩分補給を心がけましょう。1日あたり、最低でも水分1.2リットル以上を意識して摂ることが大切です。このとき、カフェインを含むコーヒー類やアルコールは利尿作用を促すため、かえって脱水を助長してしまうので注意が必要です。塩分を含んだ経口補水液（下記参照）やスポーツドリンクなどを活用して脱水にならないよう日頃から取り組んでみてください。

【脱水症状のサイン】

□皮膚がカサカサする
□尿量が減る
□体がだるくなりやる気や活力が低下する
□めまいや立ちくらみが起こる
□頭痛がする

※重症になると意識障害などが起こり命の危険につながります。

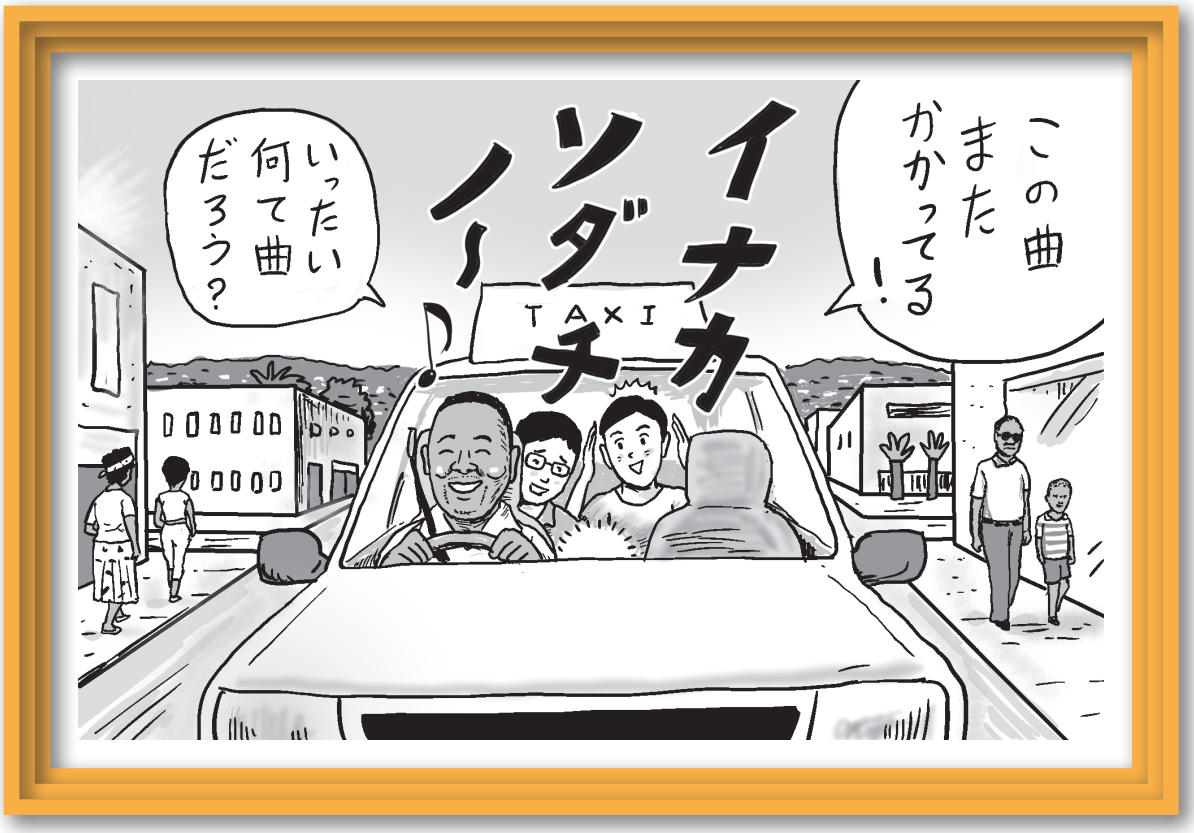
【経口補水液のつくり方】

水1ℓに塩3g（小さじ1/2杯）と砂糖40g（大さじすりきり4杯）を入れ、かき混ぜる。柑橘の果汁を絞ると飲みやすくなります。

JICA海外協力隊の

つぶやき

お題 ▶ ゴリ押し



イラスト＝牧野良幸

今月の1枚

パワープレイ♪

ある朝、派遣国の乗り合いタクシーで流れたBGM、それは突然の出来事。「田舎育ちの～♪」えっ、日本語!? いやいや空耳だ……。このダンスホールの曲、どうやら最近ものすごくはやっており、ラジオや有線はこぞって連日パワープレイ。でも、誰に聞いても曲名を知らない。だから正確な歌詞がわからない！　本当は何と言ってるの!?　モヤモヤは募る……。

ペンネーム：熱帯DJぱんださん（男性）　協力隊員（中南米・コミュニティ開発・2018年度派遣）

★ 美 ＜ 節水

朝晩2回シャワーを浴びる現地では、夜1回しか風呂に入らない私はレアキャラ。「あなたは女性なんだから特に2回入らないと駄目よ！」と叱られるも、貴重な水を確保するため、汚いキャラを被りました。

ペンネーム：赤ちゃんの成長の速さを感じる2年さん（女性）
協力隊経験者（アフリカ・PCインストラクター・2015年度派遣）

★★ 旦那さんは忘れなさい！

村で生活していると「この村で結婚しなさい！」と、よく言われる。そういうこともあり、村では日本に旦那さんがいる設定だが、それでも「日本は遠いから旦那さんにはバレない！」「旦那さんは忘れなさい！」と引き下がらない。初めはそんなやり取りに疲れてしまったが、最近はコミュニケーションのひとつとして笑い話に変えて楽しんでいる。

ペンネーム：パンは日々のごほうびさん（女性）
協力隊員（アフリカ・コミュニティ開発・2018年度派遣）

★★★ 決死の覚悟

俺はフルーツが全部嫌い。任地が南の島でも食べる気はなかった。ホームステイ先でよく出る「ブレッドフルーツ」も同じで、食べなかった。しかし、毎回毎回薦めてくる家族に負けて、決死の覚悟でひと口食べてみた。「!?」それは確かにフルーツの一種なのだろうが、想像していたものとは全然違ってすごくおいしかった。以来、ブレッドフルーツは好物のひとつになった。

ペンネーム：くらりんさん（男性）
協力隊員（大洋州・観光・2018年度派遣）

募集中のお題
「日本食」「初耳」「パーティ」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきがイラストになるかも！？

就職・進学を始め各種情報の提供など帰国隊員の進路決定までをサポート

JICA進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介

今月の相談（国際協力編）

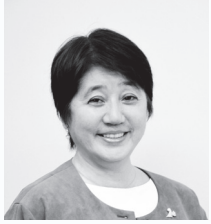
よくある相談に進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役がお答えします。

Q. 国際協力を仕事としていくために、活動中にできることは何ですか？

A. 自分なりに考えて、行動して、人の話も聞いてみましょう。

まずは、途上国の現状に対して、自分自身の問題意識を明確にすることです。次に、その問題に対して「自分がやりたい国際協力は何か」を、家族や経済的な面も含め、長期的に考えてみてください。そして、目の前の活動に一所懸命取り組むことが未来につながります。研修の企画・実施、改善策の提案、政府機関や国際機関からの関連業務に関する情報収集、現地での調査、職場でのプレゼン、客観的根拠を含めた英語での報告書作成など、うまくいってもいかなくてもそのすべてが大切な宝になるでしょう。また、さまざまな立場で活躍するプロフェッショナル（JICA・NGO・国連の関係者、商社やメーカーの駐在員、民間の開発コンサルタントなど）を現場で見て、話を聞き、自分はどうなりたいのかを具体的に検討してみてください。

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役に、進学や推薦状のこと、また就活準備など、いつでもご相談ください。



●経歴：外資系コンピュータ企業に勤務後、協力隊に参加（タンザニアの秘書隊員）。帰国後、在タイ日本大使館専門調査員、ラオスUNDP外国投資プロジェクト、JICAタイ事務所企画調査員（南々協力）、外務省国際会議準備室、国際機関人事センター勤務などを経て2003年より現職。国際協力と進学のほか、神奈川県・山梨県を中心とした民間企業・自治体・教員志望など幅広く担当。

岡部恵子（おかべけいこ）さん（進路相談カウンセラー）
担当地域：神奈川・山梨
Okabe-Keiko@jica.go.jp

活動中の出会いから仕事や生き方の価値観や未来への思いが大きく変わることもあるでしょう。壁にぶつかって、その先に新しい夢が見つかるかもしれません。慌てず、焦らず、当てにせず、頭にこないで、あきらめず。辛いネガティブ体験は、輝く未来のキャリアの糧となります。「こんなことやって何になるだろう」と先の見えないときこそ、自分の想いや周囲の人たちの言葉を書き残しておくことをお勧めします。成功したかどうかだけでなく、失敗しても工夫して働きかけた経験こそが、先々のライフステージで、かけがえのない財産になるでしょう。

松舘敦子（まつだてあつこ）さん（青年海外協力隊相談役）
担当地域：青森・秋田・岩手
Matsudate-Atsuko@jica.go.jp

前職で博士号取得者が海外へ挑戦しない現状を聞き、若者の「内向き志向」を実感。外国人とかかわる機会が増える日本の将来に不安を持ちました。そんなとき、海外でチャレンジする協力隊を知り、JICAの進路相談カウンセラーになりました。募集説明会で「帰国後就職できますか?」「帰国後どんな仕事に就けますか?」と相談されます。不安のひとつが帰国後の進路だと思います。選択肢は人それぞれです。派遣前に描いていた帰国後の職業が、2年後に変わる方もいます。皆さんの帰国後のチャレンジのために、それぞれの変化に個別対応し、気持ちに寄り添い、想いを言語化するお手伝いをしています。ひとりで抱え込まずにご相談ください。皆さんの前進する姿が励みです！

●経歴：キャリアコンサルティング技能士。産業カウンセラー。交流分析士。2013年から現職。現在、青年海外協力隊相談役の傍ら、国立大学で非常勤講師やキャリア面談を担当。高校ではキャリア教育の講義、企業ではコミュニケーションの研修をし、キャリアと心理で人と企業の支援をしている。

クロスロード

平成31年3月号［第55巻第2号 通巻644号］
発行日　平成31年3月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25
二番町センタービル
TEL：03-5226-9837　FAX：03-5226-6379

落丁・乱丁の場合はお取り替えしますので、発行元までご連絡ください。

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html

ご意見・ご感想をお聞かせください。

アイデアも大募集！

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。

以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 帰国後の就活・進路の悩みをお寄せください。

eメール
一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp

※本誌に掲載されている記事等の内容は執筆者の個人的見解であり、JICA の公式見解を示すものではありません。

CROSS YELL!!
―先輩隊員からの置き土産―

実は私

最初の数カ月間は、悶々として活動していました。

文=伊藤雅治（いとうまさはる）さん
▶ザンビア
▶経営管理
▶2016年度4次隊

PROFILE

1960年生まれ、三重県出身。電機メーカーでの33年間の勤務を経て、2017年3月、シニア海外ボランティアとしてザンビアに赴任。19年3月帰国予定。

活動概要

ザンビア開発庁の中小企業振興部に配属され、以下の活動に従事。

●中小零細企業を対象とした経営相談への対応や助言
●経営セミナーの運営

＊PL…損益計算書。「Profit and Loss statement」の略。一定期間の会社の経営成績を表し、会社の収益力を見ることができるもの。

2017年4月末に着任した後、ザンビア企業からの経営相談を受けるのだと意気込んで、「私はこんな仕事ができます」と活動案のプレゼン資料をつくりました。部門長からは「プレゼンしてもらう全体会議をすぐに開く」と言われたのですが、関係者が集まらないために会議は延びに延び、1カ月後にやっと実現。しかし、その後も顧客はなく、悶々とする日々が続きました。

そんな状況を変えようと、先輩のシニア海外ボランティア（SV）たちのアドバイスを求めて、彼らの職場を訪問。「フェア視察により主要産業の情報を得たり、顧客を開拓したりできる」「経営セミナーを開くと顧客が集まる」といった有力な情報を得ることができました。そこから、彼らとセミナー資料の共有や課題の議論を定期的に行うようになりました。さらに、国際見本市に一緒に出張したり、先輩SVが計画していた経営セミナーに講師として参加させてもらうといった機会も得ることができました。そうするなかで顧客を徐々に獲得し、活動が軌道に乗りはじめました。例えば、以下のような内容です。

●日ごろ利用していた日本食レストランのシェフから要請を受け、PL＊分析や経営会議資料の作成、日替わり弁当のチラシ作成に取り組みました。
●配属先の同僚たちに活動レポートを共有したところ、彼らからザンビア各地の元気な有力企業20社を紹介してもらうことができ、1カ月かけてそれらを訪問することになりました。
●これらの企業を訪問した後には、同僚全員を対象に報告会を実施。顧客から要望の強かったテーマ（銀行融資とスーパーマーケットへの商品導入）の経営セミナーの実施につながりました。
●中小零細企業の経営相談では、明るく笑いのある会話を心掛け、元気なザンビア企業の成功事例をもとにアドバイスしています。不得意分野の相談の場合には、ほかのSVにヒントを頂いたり、日本の先輩からアドバイスをもらったりしながら答えを見つけています。

YELL!!
困ったときは、ひとりで悩まず先輩たちに相談しよう！

配属されたタイミングや、配属先の状況、自分の得意分野と現地の状況との相性などから、活動がなかなか見つからないこともあるはずです。困ったときは、「こうしたい」というアイデアを持って先輩たちに相談すると、解決の糸口が見つかると思います。

加工食品会社を訪問する伊藤さん（右から2人目）。現在は、週に4～5社を訪問し、課題や進捗状況を確認している

今月号の表紙
ジンバブエ

文・撮影＝大岡沙織（おおおかさおり）さん
（ジンバブエ・青少年活動・2016年度1次隊）

写真の子どもたちは、私が協力隊員として図工授業の支援に取り組んだ特別支援学校の聴覚障害児たちです。心掛けたのは、できるだけお金がかからず、それでいて子どもたちが持っている能力を十分に発揮できるような授業。写真の子どもたちが持っているのは、トイレットペーパーの芯でつくった双眼鏡です。身近な材料でモノづくりに挑戦した後は、教室を飛び出し、普段は気づかずにいたものを双眼鏡で探索する。そんな時間を一緒に楽しみました。

2019年3月1日発行（毎月1回1日発行）第55巻第2号 通巻644号 編集・発行 独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局 〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル TEL：03（5226）9837 FAX：03（5226）6379